普遍的福音・日本人への福音

2011 年 11 月 15 日
西九州伝道所　佐々木正明

はじめに

福音の対象は全人類です。当然、日本人にとっても、福音は福音でなければなりません。ところが伝えられ方ひとつで、福音が福音にならないことが多いのです。地球の裏側に住む、人口 200 人足らずの部族だけが使っている言葉で福音が語られたとしても、日本人には福音になりません。たとえどんなに大きな声でどれほどくり返して語られたとしても、たんなる騒音に過ぎません。

日本で叫び続けられてきた福音は、多くの日本人にとってやかましい雑音でした。だから耳を貸す者が少なく、福音として受け取る者はさらにわずかになるのです。日本で語られた 福音は、日本語であって日本語でないようなものです。脳外科医たちが、専門用語で手術の話しているのを聞いても、私たち素人では、まったくわからないのと同じです。

日本で語り伝えられて来た福音は、日本の文化、日本の言語の成り立ち、日本人の思考方法、日本人の感覚、そして日本人の宗教観、日本人の世界観と大きくかけ離れたところで、発展させられ構築されてきたものです。中でも福音主義や原理主義的傾向の人々には、始めから自分たちの独りよがりの聖書理解や解釈を絶対化して、他の人たちの見解には聞く耳を持たない傾向がありました。ましてや宣教地の人々の考え方や聖書理解に関心を示し、その意見を取り入れるほどの広い見識は持つことは、おおよそありえないことだったのです。こと宣教に関しては、自分たちはあくまでも教える側であり、日本人は教えられる側なのです。

日本は独特な文化を持つ国です。もちろん、世界中の多くの国家あるいは民族が、それぞれ独自の文化を持っていることでしょう。しかし日本はかなり特異な意味で、独特なのです。日本が独特であると言うことに異議を唱える人たちもいますが、宗教的な見地からすると、やはり独特であり特異であると言うべきです。何についても、全人類に共通した部分と個々に特殊な部分がありますが、日本人の場合、独特な要素がとても大きいのです。しかも、それを日本人の共通意識として強く保持し、意識的であろうが無意識であろうが、日本人一人ひとりの生活の基本にしているのです。

同じ国家でも、たとえばフィリピンやインドネシアのように、植民地とされるまではそれぞれ似通った生活様式を持った小部族同士で、互いに争いまた協力し合って生きているだけで、宗教も、一定の生活様式もあまり発達せず、確固とした独自の文化と言えるほどのものを所持していなかった人々は、容易に、侵略者たちの文化をより優れたものとして受け入れることが出来ました。

でも日本のように、たとえ個々の地方には特色があったとしても、日本人としての共通の自覚を持ち、かなり強い宗教的感覚を共有し、一定の生活様式を守り続けてきた国、独自の生活哲学を持つ国では、自分たちの共通の自覚、共有している感覚、共に長く守り続けてきた習慣に合わないものを受け入れることは、非常に困難なのです。あらゆる意味で別世界の、西欧で作り上げられたキリスト教をそのまま輸入し、まるごと受け入れさせようとしてもどだい無理な話です。その無理な話を、一所懸命にやってきたのが日本のキリスト教です。

プロテスタント・キリスト教はその伝播以来、日本人には受け入れがたいもの、文化的にも、宗教的にも異質なもので有り続けました。キリスト教も日本人も、基本的に変わらないまま反発し合って来たのです。いったい、西欧キリスト教が説く福音はなぜ日本人に拒絶され続けるのか、西欧キリスト教の特質と日本人の特異さ、あるいは格差というべきか違いというべきか、その相容れない点をいくつか挙げ、あわせて対応策も考察して論じてみたいと思います。そうすることによって、日本で伝道を志すクリスチャンたちの猛省を促すことになれば幸いです。

（知的障害を持つ息子が、庭に野菜の種を蒔きました。結構勢いよく育っているので喜んでいます。ところで息子は、同じ種を小さなプランターにも蒔いていました。こちらの方はもっと元気に伸びて、植え替えの時期になりました。息子は喜んで苗を畑に移したのですが、それ以後さっぱり育たなくなってしまいました。
どうやら、プランターの土と庭の土が全く違っていたようです。たいていの種はどこでも芽をだし、そこの土にかなり慣れることができるのですが、いったん苗になってしまうと、新しい土地に慣れるのは相当難しいのだそうです。
日本という土壌に持って来るのは、キリスト教という苗ではなく、聖書に提示されている、福音という種にしたいものです。）

Ｉ．　知識偏重の西欧キリスト教神学

西欧で発展し構築されてきた神学は、決定的に知識偏重です。ギリシャに興った思考方法は征服者であるローマを征服し、それに続く世界をも席巻しました。その中で育ってきたキリスト教神学も当然、ギリシャ的思考によって養われてきました。なかでもプロテスタント神学は、ギリシャ思考への回帰であるルネサンスという産婆の手の中で産声をあげ、決定的にギリシャ的思考の揺籃の中で呼吸をし、ギリシャ的思考のミルクを飲み、ギリシャ的思考の育児室で育ってきたものです。端的に言うと、理屈っぽいのです。何でも人間の理性で論理的に説明しようとするのです。

西欧プロテスタント・キリスト教の理屈っぽさは、時を同じくして発展してきた西欧哲学との共存と争いの中で、鍛え上げられたものとも言えます。観念的であり（あると思えばある、ないと思えばないというような考え方）実利的であった（なんでも自分たちの生活に役立てばそれでいいという考え方）日本では、明治になって西欧文化に触れるまでは、何事でも思弁的な考証を試みる者がほとんどいなかったのですが、西欧世界では、様々な哲学が人々の考え方を大きく左右し、社会の形成に強い影響を与えてきました。当然、キリスト教もそれらの影響

から逃れることはできませんでした。反キリスト教的哲学に対しては、弁証論的な神学も発展して、勢い、理屈っぽいキリスト教にならざるを得ませんでした。

こうして西欧神学は、僅かの例外を除いて、暖かく血の通った親子関係のような信仰を、冷たい神学に取り替えてしまったのです。父なる神への単純な信頼と憧憬と賛美と甘えを、単なる理屈の集積に変えてしまったのです。かく言う筆者は、16歳の雪深い冬、まだ翻訳出版されて間もなかった、ヘンリー・シーセンという方が書いた組織神学、特にその中の「神論」を読んでクリスチャンになる決心をしたものですから、まさに、ギリシャ思考の西欧神学によって目覚めたのですが、日本人としてこれは例外中の例外です。

そのころ、わけあって下宿先から追い出されて、友人に紹介された独身牧師のところに転がり込んだのがきっかけです。貧しい青年牧師の書棚に大切に保管されていた、「高価な本」を盗み読んだものでした。小学生高学年の頃シェイクスピアに惹かれてから、ずっと西欧文学に親しみ、高校に入ってからは西洋人が書いた人生論などを読み漁っていたために、欧米人が書いた神学書も興味深く読むことができたのでしょう。

ギリシャ的思考に立ち、様々な哲学と同じ土俵で相撲をとって来た西欧の神学では、神についてこと細かく考え、説明しようとします。聖書に教えられていることを懸命に調べつくそうとしているのですが、その態度は、聖書の教えを忠実に学ぼうというより、むしろ、自分の知りたいことを聖書の中から探り出そうというものです。聖書が強調していることを強調するのではなく、自分が知りたいことを強調するのです。当時の筆者にとって、そのような西欧神学は大いに啓発的だったのですが、一般の日本人には、ほとんど無意味です。ましてや、人間論、キリスト論、罪論、救済論、贖罪論などは、もともとそのような事柄には興味を持っていない「普通の日本人」にとっては、何の意味もありません。

日本人の神意識、宗教感覚、世界観、人間観、価値観は、西欧の人々のものとはまったく違うのです。その違うと言う事実を認めないまま、西欧の神学を基盤とした福音を語っても、日本人には猫に小判、馬耳東風、魚を見たことがない山岳民族への刺身というより、やかましい銅鑼（ドラ）やうるさいシンバルです。福音を福音として語るためには、日本人の宗教感覚に合わせて、日本人にわかるように、日本人の必要に応えるように語らなければなりません。日本人の世界観を理解して、そこに「福音として」提示しなければなりません。日本人の人間観や価値観を知り、共通基盤に立った上で福音を提供しなければ、福音は福音とならないのです。

Ⅱ．　日本人の宗教観

日本人に、福音を福音として語ることができるように、まず、日本人の宗教観について、基礎的な考察をしておきましょう。

Ⅱ．１．　宗教的二重構造

「あなたは神の存在を信じますか？」と尋ねると、たいていの日本人は「信じません」と答えます。自信をもって「信じます」と応じる日本人はごく僅かでしょう。ところが、神の存在を否定する日本人の大多数は、驚くほどに宗教的で、ことあるごとに神社仏閣にお参りをし、たくさんの宗教行事に参加しているのです。日本人の多くは、たとえ理屈では神の存在を否定していても、宗教を良いものと認め、特殊なものを除いては宗教の悪口を言うことさえ許しません。

大多数の日本人は、このように宗教的な二重構造とでも呼ぶべき感覚を持っています。すなわち、神の存在を否定する理屈っぽい感覚と、心の奥底で神を感じている理屈を越えた本能的感覚です。日本人が「神」と言った場合、無意識のうちにこの二つの感覚の板挟みになっているのです。理性的に科学的に考える教育を受けている日本人は、自分も理性的であり科学的な現代人であると、認められたい願望を持っていますので、つい、科学的であることを飛び越えてまで科学的であろうとして、「神はいない」と言ってしまうのです。

理性的科学的感覚から、通俗的日本人の神観である多神論、すなわち八百万の神々を眺めると、余りにも低次元で、肯定したり是認したりする気持ちはおこりません。犬の神、牛の神、豚の神、鼠の神、木の神、石の神、水の神、山の神、火の神、風の神などなど、まさに信じられないのです。そこで一足飛びに、神の存在を否定するところまで行ってしまうわけです。

Ⅱ．２．　「神＝上」の曖昧な多神論的神観

このような多神論的感覚はまた、人間より少しでも上の能力を持つものを、すべて神としてしまいます。猫でも鼠でも、人よりも優れた感覚や能力を持つ部分があると、少なくてもその部分においては神、すなわち人より上の存在になるのです。神とは上のことであり、「かみ＝上＝神」であり、「髪や守や頭」も「かみ」なのです。野球の上手い人は野球の神、料理の上手い人は料理の神、釣りの上手い筆者は釣りの神となるのです。ちなみに、今年の六月から八月末まで、1.5kg を超えるチヌを四十尾以上釣り上げました。最大は 2.5kg です。夏の間、精々一週間に二度ほど、一回二時間弱の釣りですが。要するに魚がたくさんいるのです。自慢話はそこまでにして・・・・・。

理性的な日本人は、たとえ神という表現を多用し、なんでも神にしてしまう信仰形態が、そこここに残っていることを認めたとしても、それをもって神が存在するとは言いません。日本人が神の存在を否定するときの神は、このように多神論的な神なのです。

Ⅱ．３．　心の奥底にある汎神論的神観

一方、日本人が神の存在を認めるとき、日本人は汎神論的な感覚で考えていると言えます。日本人の多くは多神論的であるより汎神論的です。多くの神々を認めるのではなく、あらゆる

物の中に宿っておられる神､あるいは神羅万象に潜んでおられる神の性質を認めているのです。木も山も川も、馬や牛などの大きな動物、あるいはもっともっと小さな生物の中にも、宿っておられる神の姿を感じ、その見えない神の姿を尊いものとして崇めるのです。

汎神論者は基本的に、神を見えない存在、隠れた存在とみなしています。ところがこの汎神論は、何とかその神を礼拝の対象にして、論理付け、体系化しようとすると、たちまち低級な多神論に陥ってしまいます。まさに、汎神論と多神論は紙一重なのです。

ですからほとんどの日本人は、自分の心に感じている神の感覚を大切にして、多神論に堕落させることはしません。八百万の神々などと言いながら、日本人は、自分が心の底で感じている神の感覚を大切にし、八百万の神々とは一線を画すだけではなく、それを概念化さえしないのです。というより、ほとんど本能的に概念化することを恐れ、そっとしておく、幽玄な神として分からない神、理解できない神、理解しようとしてはならない神、あれこれ詮索してはならない神、時には口に出すことさえはばかる神として残しておくのです。

Ⅱ．４．　揺れ動く神観と一神教的神観

もちろん多くの場合、同じ日本人が汎神論と多神論の間を揺れ動いています。たとえば、日本には数え切れないほどの神社があり、社があり、祠があります。それぞれに祀られている神がいて、それぞれにいわれと歴史があります。それはたしかに多神教的です。ところがそれらの場所で参拝する人たちは、そこにはどの神が祀られているかなどと言うことに、いっさい頓着しません。どこの神社に参詣し、どの社で頭を垂れようが、まったく同じ気持ち、同じ心で、見えない方、知られない方、わからない方に礼を尽くそうとしているのです。そこに祀られている神にではなく、その背後にいらっしゃる貴い方を、敬っているのです。その方が果たして一人の神か、一万人の神かは問題ではありません。日本人が感じているのは、たとえ一万人の神が居ても、それらはみな同一の神、唯一の神なのです。

そのような日本人の感覚は、すでに汎神論を超えて一神論に到達していると言えます。日本人は神を理屈で説明しません。理屈で説明できるような神は神ではないと、本能的に感じて、理屈で説明しようとするキリスト教を胡散臭く思うのです。理屈で説明しませんので、自分たちの神概念が一神論的だなどと詮索もしません。でも、よく観察すると、確かに非常に強い一神論的性格を持っています。人間文化までも進化論的に見ようとする人たちが言うように、多神論から汎神論に移り、汎神論から一神論に進んだのではなく、一神論から汎神論に流れ、多神論に堕落したと考えたほうが良いと思います。

この貴い方を言葉で説明すると、たちまち汎神論的になって、草木にも動物にも神は宿っておられると言ったり、宇宙万物が神そのものだと主張してみたり、果ては多神論まで成り下がって犬や猫まで神だと言うことになります。ですから日本人は、神を説明しようとしない崇高な思いと、ヘビやカエルまでも神としてしまう低俗な信仰心の間に、揺れ動いているのです。

Ⅱ．５．　アニミズムのオカルト的感覚

また汎神論的な感じ方や多神論的考え方は、すぐにもあらゆる物が霊を宿しているとか、魑魅魍魎（ちみもうりょう）を始め多くの霊どもが私たちの周りで蠢（うごめ）いているとか、いささかオカルト的な感覚も育てます。つまり、アニミズムの世界です。このアニミズム的感覚は、日本独自のものではなく、むしろ世界共通のもので、キリスト教や仏教、あるいはイスラム教やヒンズー教、その他どのようなメジャー宗教を文化とした国家や地域でも、必ず強いアニミズムの傾向があります。ですから、宗教までも進化論的に見る人たちは、素朴なアニミズムがあらゆる宗教の苗床であると主張するわけです。

七世紀に至って仏教が入ってきたとき、日本的感覚は仏教を受け入れることが出来ました。とはいえ、仏教を受け入れた日本人の感覚は、一神論的感覚ではありません。一神論的感覚では、神とはそっと知られないままにしておくべきお方であり、仏教の感覚とは相容れないものでした。しかし、日本人の汎神論的、多神論的、アニミズム的感覚は、容易に仏教を受け入れ混合することが出来たのです。加えて、日本に入ってきた時の仏教はすでに原始仏教からは遠く離れ、行く先々でシンクレティズム（宗教混合）の変遷を繰り返していたのですから、なおさらのことです。

Ⅱ．６．　日本的観念論と実利主義

日本人は見えない神、説明できない神を、見えないまま説明できないまま、そっとしておくことを選びました。日本人にとっては、理屈がどうであるかということよりも、自分がどう感じるかという主観が大切であり、自分がどう体験したかという観念的な実存主義とでもいうものが重要なのです。極論を言えば、日本人にとっては神が実在するかどうかではなく、神を感じるか、どのように感じるかが重要なのです。そして神を感じて生きることが、あるいは感じないで生きることが、自分の生活に、あるいは家庭や地域社会にどのような益をもたらすか、さらには日本の社会や日本の国にどのような貢献をするかという、実利的な面が最も強調されるのです。

日本人の一般的感覚からすると、キリスト教信仰は、日本人にも日本社会にも貢献するところは少なく、かえって日本の社会状況や社会構造、さらには習慣や伝統あるいはものごとの考え方や運び方かたにまで、噛み合わないところが多く迷惑な存在なのです。日本の文化や社会状況と関わりのないところで構築されたキリスト教は、日本人に合わないのです。それだけではなく、キリスト教は自分たちの正しさを主張して、日本に合わせることを妥協として嫌い、ただ一方的に日本や日本人を非難してやまないのです。日本人は、世界で最も強く実利主義の傾向を持つ民族です。日本人の、そして日本のために益にならないと思われるキリスト教は、邪魔以外の何ものでもないのです。

Ⅲ． 真に日本人的神概念

では本当に日本的というか、他の諸国諸民族と異なって、日本人独特と思える宗教感覚は何でしょう。

Ⅲ．１． 見えない神を見えないままに、知り得ない神を知り得ないままに

やはり、見えない神を見えないままに敬い、見えないまま尊ぶ思いであることを、第一に挙げるべきでしょう。それは当然、偶像を作らず、祀らず、拝まないことです。日本人本来の神意識からすると、偶像を礼拝することは論外です。ご神体という言葉はあっても、そのご神体そのものが形の無いもの、たとえあったとしてもせいぜい自然物をご神体に「みなして」奉っているに過ぎません。いま、日本に見られる偶像は、たとえ日本古来の神道に属するもののように見えたとしても、本来、日本的なものではなく、仏教との混合によってもたらされたものです。

またさらに日本的なところは、この見えない神を知り得ない神として尊ぶことです。理屈づけしない、説明しない、詮索しない、体系化しない、何にもしないまま心の奥底で感じる貴く尊い方を、素直に崇めるのです。この感覚は、見事に体系付けられた宗教の前に出ると、ひと時は驚嘆もし羨ましくも感じるようで、仏教が伝来したとき、その眩（まばゆ）いばかりの数々の偶像と見事に体系化された教えに驚き、歓喜してそれを受け入れた人々がいた通りです。あるいは西欧キリスト教に接する機会があった学者たちが、自分たちの素朴な心の宗教である神道に満足出来ず、キリスト教神学などを参考に体系化して復古神道を唱えたりもしました。さらには文明開化の時、西欧植民地主義諸国のキリスト教に接触し、日本人としてのより強固な精神的支柱が欲しいと思われたとき、この復古神道を基とした国家神道が作られたりもしたのです。

Ⅲ．２． 日本人に合わない可視化と体系化

ただこのような体系化、すなわち理屈づけ、あるいは可視化は、本来の素朴で素直な日本人の神意識には合わないようです。仏教は宗教であっても、日本人の神意識、神観とはかけ離れたものであり、一方では哲学体系化し、他方では死者にまつわる儀礼に留まっています。日本人の神意識は、やはり、「なにごとのおわしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」という感覚に尽きるようです。この言葉自体は西行法師のものですが、仏僧でありながら非常に神道的な感覚、つまり日本古来の宗教感覚を持った人物であったため、伊勢神宮を参拝したときにこれを詠んだものです。日本人にとっての神は、人間の知力や理解力や言語表現力をはるかに超えた方であり、理解することも表現することもはばかる、畏れ多いお方なのです。

日本人は、はなはだしく混乱した宗教観の中にいるようでありながら、実は、心の奥底で大きく気高い唯一の神を感じています。それを神と呼ぶことさえ少なからず躊躇するほどの存在

です。そのような方を感じているために、八百万の神々をはじめ、目に見える神や、理屈っぽく説明し尽くされる神には、本能的に疑念を持ってしまうのです。疑念を抱きながらも自分の宗教心を表現しようとすると、そのような通俗的な表現以外にはないために、多くの日本人は宗教的混迷の中に溺れていると見られるのです。当然、多神教的な感覚に弄ばれ、占いに興味を抱き、オカルトに恐怖を感じる次元に留まっているわけです。

Ⅳ.　聖書の宗教観

筆者が言う「聖書の宗教観」とは、西欧キリスト教の宗教観とは違います。すでに述べたように、西欧キリスト教の宗教観はたとえ聖書に基盤を置いているとは言え、あくまでもギリシャ的思考によって、西欧の文化の中で、西欧の実情に合わせて形成されたものに過ぎません。聖書の宗教観とはおのずと異なるところがあるのです。

聖書の宗教観というときも、いくつかの仕分けが必要です。まず、聖書の記述に大きな影響を与えている、聖書が書かれた当時そこに住んでいた一般の人々の宗教観に目をむけなければなりません。聖書が書かれた当時と言っても、聖書はおよそ 1500 年の長期にわたって書かれたものであり、書かれた場所もまた一様ではありません。

Ⅳ.１.　創世記に表れた神観

まず、聖書の中でも最初に書かれた創世記から、出エジプト記に記された十戒の賦与に至るまでが、とても大切です。モーセがこの部分を書いたのは、まだまだイスラエル民族が、曖昧な神観の中に生きていた頃です。そのようなとき、神にとって最も大切だったのは、人類の救済のために選んだイスラエル民族が、まず基本的に正しい神観を持ち、神との正常な関係を保つことでした。

そこで神が人類にお与えになった最初の書物、すなわち聖書の最初の書である創世記は、神の自己紹介の書物であると言えるのです。当時イスラエルの人々は、エジプトの多神教の背景の中で生きていました。エジプトだけではなく、当時の周辺の民族も、それまでイスラエルの先祖たちが関わってきた民族たちも、みな例外なく多神教の感覚の中にいました。あるいは、汎神論的感覚もあったかもしれませんが、その点は、聖書のなかに明らかではありません。

Ⅳ.２.　多くの神々に勝る絶対の神

ただ、たとえ多神論の感覚の中に生活していたとしても、イスラエルの人々の中には、自分たちは多くの神々の中でもより強い神、優れた神、勝った神を拝んでいるという感覚はあったかもしれません。出エジプトの出来事以前は、自分たちが先祖代々拝んできた自分たちの神という感覚の方が強かったのでしょうか。出エジプト直前の十の奇跡は、当時のエジプトの神々

の力に対する挑戦で、イスラエルの神がエジプトの神々より強いことを示したのであると言われていますが、そのときイスラエルの人々は、自分たちの神が他の神々より力強いことを知ったと思われます。

さらに神は火の柱と雲の柱、二つに分かれた紅海とエジプト軍の壊滅、甘い水に変えられたマラの水、天から与えられたパンと肉、水を流れ出させたメリバの岩、アマレクとの戦いの勝利と、奇跡に継ぐ奇跡を見せて、多神論的世界に生きてきたイスラエルの人々に対して、あらゆる神々を超えた力を持つ神としてご自分を現してくださいました。

十戒の第一戒は、すなわち他の神々を拝むことと、それに関連しての偶像礼拝の禁止は、イスラエルの神の圧倒的な力を見せた上での、「私こそあなたがたが礼拝するにふさわしい神である」という宣言です。多くの神々の中で生きてきたイスラエル人に向かって、「私はアブラハム、イサク、ヤコブの神である。あなたがたの先祖伝来の神である。だから、私だけを礼拝しなさい」というのでは、まだ説得力が足りませんでした。しかし、「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である」と、数々の奇跡を通して奴隷の状態から救い出された事実を確認させ、「わたしこそ、それを成し遂げた神、あなたを救い出した神、エジプトの神々に勝る神、周囲の民族の神々よりも強い神である」と改めてご自分を紹介し、その上で、「あなたには、私の他に、他の神々があってはならない」と命令されたのです。

天地創造の物語が記されている創世記は、出エジプトの出来事の後、数十年、まだ荒野を旅していたときに与えられたものです。この天地創造の物語を通して、神は単に力強い神、他の神々に勝る神としてではなく、まさに絶対の神、すべての物、すべての者、すべての神々を超越した、「超絶の神」としてご自分を自己紹介してくださったのです。

「はじめに神は天と地を創造された」という日本語は、人間が神について述べているかのように、尊敬語に翻訳されています。たしかにこれはモーセが書いたのですから、それでよいでしょう。でもこれは、「あなたがたの神である私は、天と地を創造した神である。他のあらゆる神々と異なり、それらの神々を凌駕し超越した、異次元の神である」という、神の自己紹介にあたる言葉として受け取るのが良いのです。多神論的感覚で、目に見え体に感じるあらゆる事物を神々としていた人々にとっては、驚嘆するような「神」の自己顕現であったわけです。

出エジプトを果たし十戒を与えられたイスラエル民族に対して、神は創世記を与え、ご自分を天地創造の神として紹介した上で、人間がどのようにして生まれ、イスラエル民族がいかにして登場したかを教え、ご自分とイスラエル民族の関係を理解させ、イスラエル民族が、神ご自身がお選びになった民として正しく歩むように、導こうとして下さったのです。

Ⅳ．３．　神と言う言葉の問題

ところで、神はここで大きな妥協をしておられます。なぜなら神は、本来、当時のイスラエル民族や周辺の民族が用いていた「神」という言葉で、表現できるようなお方ではないからで

す。しかしいかに神といえども、当時の人々の言葉を用いないで、当時の人々に語りかけることはできませんでした。従って、当時用いられていた神という言葉が、いかにご自分を表す言葉としては不充分であったとしても、それを使わずにはおられなかったのです。

当時のイスラエル民族は、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神については聞いていたことでしょう。しかしこの神が、当時の「神」とい言葉では言い表せない、天地の創造者であることについては知りませんでした。そこで、ご自分は彼らが知っている神々とはまったく違うこと、本質的にまた根源的に異なる神であることをはっきりさせるために、律法の前に天地創造の物語を持ってこられたのです。ここでイスラエル人たちは、あらゆる神々とまったく異なる絶対の神について、初めて知ったのです。それが教えるために用いられたのが、創世記第一章一節に用いられている神という言葉、エローヒムです。普通に用いられていた、エルという神を表す言葉の複数形です。このエローヒムという言葉が選ばれた背後には、聖書を日本語に翻訳したとき、翻訳者たちが神という言葉を選んだ時より、もっと多くの、困難な問題があったのかもしれません。

Ⅳ．４．　天地創造の物語の示すもの

この天地創造の物語の中で、神は、ご自分が無からすべてのものをお創りになった方であることを示し、すべてのものは神の支配と管理の下にあり、秩序正しく存在していることを教えています。また神は、人間を神に似せたものとしてお創りになったと語り、人間が神の創造のひとつでありながら、特異な存在であるとことを伝え、神と人間との基本的な関係を明らかにしておられます。

その基本的関係で最も大切なことは、人間が神に似せて造られ、霊的な存在者となったことです。霊的存在となった人間は、霊である神と心を通わせることが出来ます。神と心を通わせること、知情意をもって神を敬い、褒め称え、礼拝することこそ、人間の人間としての姿なのです。

神は、イスラエル民族がそろって神を礼拝することを教え、そのために条件を整えてくださいました。神が人間をお造りになった目的は、人間が意識を持って神を礼拝することです。他の被造物も神の栄光を現しますが、意識を持って神を礼拝し、その栄光を現す三次元の被造物は人間だけです。そして、人間の命と喜びは、命の源である神との交わりにあるのです。その礼拝の条件を整えてくださったのが、安息日の定めです。イスラエル民族は長い期間、奴隷の生活をしていたために、自己管理ということには慣れていませんでした。そこで、神は七日に一日は仕事を休んで神を礼拝する日と定め、民族として規律のある生活ができるようにしてくださったのです。

Ⅳ．５．　六日間の労働と七日目の休み

そのような大切な神との交わりのための安息日を定め、それをしっかりと守るように強烈な

印象を与えて教えたのが、神の六日間にわたる創造と七日目の休息です。六日間の創造と七日目の休息を、文字通りの事実であるかのように信じている、原理主義的クリスチャンも多いのですが、真実はそのようなところにはありません。神はそのような、非常に分かりやすく印象的で、いつまでも記憶にとどめておくことができるような表現をもって、七日目を休息の日とするようにお教えになったのです。

事実と真実との区別が曖昧な西欧的物事の考え方では、聖書は間違いのない神の言葉であると言った場合、書かれていることすべてが事実であるとなりますが、日本人の多くは、事実と真実は別のものであると気づいています。事実は単に事実であって、真実ではないのです。聖書は真実の書であり、間違いのない書物です。しかし、事実だけを記した書物ではないのです。神にとって、天地創造が六日で行われようと数十億年かけて行われようと、少なくても神と人間の関係を教え、救いに導く上ではどうでも良いことだったのです。モーセの時代の人々にも進んだ科学の中に生きる現代人にも、そのようなことはどうでも良いこと、少なくても日常生活の上でも信仰生活の上でも、ほとんど何の意味もないことです。神は意味のないことを、わざわざ聖書に書かせることはなさいません。人間にとっても神にとっても大切であるため、わざわざ聖書の冒頭に、その話を持ってき来られたのです。

創世記の天地創造の物語には、神は七日目にお休みになったと記されていますが、神がお休みになるはずがないことは、イエス様もはっきり教えておられます。人々の生活が複雑になったイエス様の時代の社会では、すでに、安息日を字義通りに遵守することは実際上困難になっていました。そこでイエス様は、安息日のために人があるのではなく、人のために安息日があるのだと諭し、場合によっては、安息日の掟が破られなければならないこともあり得るとことを教え、安息日の本当の意味を明らかにされました。そのとき、イエス様は、神は休みなく働いておられるのだと明確にお語りになりました。（ヨハネ 5：17）　このイエス様の言い方によって、単純な、「事実＝真実」の感覚で聖書を読むことが間違いであることがわかります。聖書は事実を語る書ではなく、真実、あるいは真理を語る書なのです。

創世記の天地創造の記述は、文字を読むということが一般的でなかった時代、筆記用具もまだ発展していなかった時代、書物というものがほとんど存在していなかった時代に書かれたものです。作るのがとても難しく非常に高価だった、動物の皮を上手になめして作ったもの、普通、羊皮紙と呼ばれているものに書かれたのだと思われます。あるいは粘土板だったかもしれません。ですから当時の聖書は、多くの人々に読まれるために書かれた本ではなかったことに、気付かなければなりません。それはみんなが手にして自由に読むのではなく、大切に保管され、ひとりの人によって多くの人々に読み聞かせられ、記憶されるために書かれた本なのです。

創世記の天地創造の物語は、当時の人々に理解しやすく、覚えやすく、印象深く、記憶されやすく、いつまでも忘れられないように、特別の配慮のもとに書かれているのです。大量印刷された現代人が持つ書物とは、まったく異なった機能が与えられていたわけです。その点を理解していなければ、間違った読み方をしてしまいます。

Ⅳ．６．　天地創造の神・唯一の神？

キリスト教が信じているのは唯一の神です。でも、聖書の記述から言うと、果たしてこれは正しいのでしょうか？　聖書を注意深く読むと、それほど単純ではないのです。先に述べたように、神という概念は、当初とても曖昧であったためです。神という言葉自体が、そのころ周辺に住んでいた人々の言葉の借り物でした。当時の人々はたくさんの神々を信じていました。そして、彼らの「神」という言葉の定義からすると、たしかにたくさんの神々が居て、現実的に力を持つ存在もあったのです。

そのような当時の一般的な神概念に対して、神は創世記の記述をもって、天地の創り主としてご自分を紹介してくださったのです。とはいえ、時間的にはそれに先立って、エジプトでの十の奇跡とそれに続く幾つもの奇跡をもって、ご自分を多くの神々の中で最も力ある神として、現してくださいました。アブラハムに対しても、イサクやヤコブ、さらにはヨセフに対しても、神は唯一の神としてではなく、多くの神々の中で力ある神として現れてくださいました。モーセにしても、少なくても、ホレブの山の燃える芝に現れてくださった神と会話を交わした時も、まだ、唯一の神としてではなく、アブラハム、イサク、ヤコブの神として認識していたに過ぎなかったと考えられます。

天地創造の物語によって自己紹介をしてくださった後でも、神は、他のすべての神々を超越した神であることははっきりさせても、現在のキリスト教が教えるような意味での、唯一の神であるとは教えておられません。十戒が与えられたとき、イスラエルの民は、たしかに、自分たちをエジプトの地、奴隷の家から連れ出してくださった神だけを礼拝するように教えられました。ところがそれは、唯一の神という理解ではなく、あくまでも、多くの神々の中で、自分たちが礼拝し、自分たちが仕える神という意味です。

Ⅳ．７．　唯一の神としての顕現

天地創造の神が、ご自分は唯一の神であるということを初めて明らかにされたのは、申命記の４章３５節と３９節です。これは十戒が与えられてから、およそ四十年もたってからのことでした。ご自分が唯一の神であり、他に神は存在しない事を明らかにされたこのとき、神は出エジプトの出来事、十戒が与えられたときの事を再び思いおこさせ、それらのことが起こったのは、彼らの礼拝する神だけが神であり、他に神がいないことを彼らが知るためであったと語られたのです。

イスラエル民族が、全世界の祝福のために選ばれた時から、すなわちまだイスラエルが誕生もしておらず、先祖のアブラハムがカルデヤ人たちの間から選ばれた時から、この時点まで、およそ六百年の年月が流れています。多神論的感覚で生きていた人々に、唯一の神であるご自分を啓示されるまでの間、様々な体験と導きと教えを与え、多くの奇跡を見せた上で六百年です。神は非常に忍耐深い方であると言うべきか、むしろ、神の時間は私たちの時間と異なると言うべきなのでしょう。

申命記の中で、神は唯一であるという教えは４回くり返されていますが、（4：35、39、7：9、32：39）これが果たして現代キリスト教が教えるような意味で、当時の人々に理解されていたかははなはだ疑問です。当時の人々には、まだ先に述べた言葉の定義の問題も残っていました。神と言う言葉は、もともと多神教の中の言葉です。たくさん神々があったのです。創世記１章で神様がご自分を呼ぶとき、「われわれ」とおっしゃっていることに気づく人は多いのですが（1：26）、なぜ、神はご自分を複数でお呼びになったのか、いまでも、学者たちの間で議論が分かれています。

たしかに、多神教の中でご自分を唯一絶対の神として現さなければならない事情にあって、「われわれ」という複数形の用語を用いるのは、賢いことには思えません。ですから、この言葉が選ばれた背後には、現代の私たちにはわからない特別な事情があったのでしょう。当時の人々の信仰の対象には、不思議な事をする神々もいたに違いありません。私たち、現代のクリスチャンの感覚からすると、それらは神ではありませんが、彼らにとってはやはり神だったのです。それらの神々の中で、主である神、天地創造の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神は、特別な意味の神、別の定義が必要な神だったのです。この特別な定義で神と言うなら、天地創造の神以外にはいなかったのです。

イスラエルの人々が、現代キリスト教が言うような意味での唯一神を信じるようになったのは、聖書を読む限り、かなり後のことです。天地の創造者である主が神である、あるいは主こそ神であるという理解は、さまざまな体験と教えを通して次第にイスラエルの人々の間に浸透して行きましたが、多神論的世界観はなくなっていなかったと見るべきです。一般のイスラエルの人々にとって、他に神はいないという表現は、かなり後代に至るまで、「神と呼ばれるものはたくさんあるが、私たちが拝み仕えるべき神は他にいない」、と言う意味であったと捉えるべきです。

紀元前八世紀になって、イザヤという偉大な預言者が現れ、幾度もくり返してイスラエルの神が唯一であり、全世界にただひとりの神であることを明らかにする前は、（イザヤ 43：10、44：6、8、45：5、6、21、14、18、21、22）現代キリスト教が教えるような唯一絶対の神という考え方は、天地創造の物語で明らかなはずなのに、聖書の登場人物の中にあまり見られないのです。あるいはダビデ王は、そのような理解を持っていたかもしれませんが、（Ⅱサムエル 7：22、詩 18：31）一般人の理解ではありませんでした。イスラエルの人々の神観念が、現代キリスト教が教えるような意味での唯一無二絶対の神となったのは、イスラエルから偶像礼拝が一掃さされた、バビロン捕囚のときであったろうと思われます。

神は、イスラエルの人々が長いあいだ間違った神観念を持っていたことを、あまり重大な事柄として捉えてはおられません。むしろ神が重大かつ深刻に考えておられたことは、イスラエルの人々が他の神々に心を寄せる偶像礼拝でした。イスラエル人たちが観念として、どれだけ多くの神々の存在を信じていても、神にとっては大した問題ではなかったのです。天地創造の主である神、イスラエルをエジプトから救い出した神だけを礼拝し、この神だけに仕えればそれで良かったのです。

大雑把な言い方ですが、聖書を通して私たちに現れて下さっている神は、何事においても、私たちが事実を正しく理解をしているかどうかよりも、私たちと神の関係がより良く保たれているかどうかに、強い関心を持っておられるのです。事実であるかよりも、真実であるかです。（参照ヨハネ 14 : 6）　神は始めから天地創のお働きを、事実通りに説明しようなどとは、考えておられなかったのです。

天地創造の物語の事実は余りにも壮大すぎて、どのように科学が進んでも事実の１パーセントも把握できないでしょう。ビッグバンだの、暗黒物質だの、暗黒エネルギーだの、あるいは原子核だの陽子だの電子だの、はたまた素粒子だのニュートリノだの、神が創造された宇宙の事実を事実の通り記していたらきりがありませんし、まったく無駄なことです。人間の知識は大海の一滴にも満たないのです。天地創造の物語は事実を教えようとして記されたものではなく、真実、つまり、神と人間との正しい関係を伝えるため、記されたものです。

キリスト教神学があれほど強調している唯一の神を、神ご自身はむしろ自明のこととしてあまり表に出さずに、人間が理解するのをゆっくり、言い方によれば忍耐深く待ってくださった事実は大切です。神がご自分を紹介してくださったとき、あくまでも人間の理解力に応じて、多神教の文化の中に生きている人々の感覚を前提として、ご自分を現そうとしてくださいました。その意味で、天地創造の物語は意義深いものなのです。

Ｖ．新約聖書に表された神観

新約聖書に表された神観は、現代のキリスト教神学の教えるところにかなり近くなります。ユダヤ人たちの偶像礼拝の悪癖は、バビロン捕囚の苦しみを通してほとんど完全に払拭されたようですが、同時に、神観も確固たるものとなったと考えられます。

Ｖ．１．　四福音書に表された神観

四福音書に表現された神のみ姿は、完全に、天地創造をされた唯一の神です。ただし、モーセの律法に表された神、すなわち、やがてその中から救い主が生まれることになっている、民族全体の取り扱いに重点を置かれる厳しい神ではなく、一人ひとりの置かれた状況とその必要に目を注いでくださる、優しい神として描かれています。

一方、サドカイ派などの少数の者を除いて、一般の人々の世界観は相変わらずアニミズムで、日本語で「幽霊」と翻訳されている霊的存在も信じていました。神という特別な霊的存在を認めながら、様々な霊的存在をも認めていたわけです。イエス様もまた、幽霊と翻訳された霊的存在者を認めておられたと考えられます。記述を調べると、それは、人々に憑いて病気などをもたらす悪霊とは、異なった存在だと思われます。イエス様の弟子たちは、人々に憑く悪霊を恐れることはありませんでしたが、幽霊は恐れていたりするからです。

四福音書に表された神観で最も突出しているというか、ユニークなものは、キリストが神とされている点、また、聖霊も神と同等に取り扱われている点です。当時のキリストの弟子たちや初代の教会の人々が、このことをどのように理解していたのか確実なところは不明です。しかし、四福音書だけではなく新約聖書全体が、明らかに、父、子、聖霊を神として認めていながら、唯一絶対の神を当然としていたのです。

いわゆる三位一体という神学の、厳密な神学的理解は大変難しいものです。というより、人間の頭脳が詮索し把握することができる、限界を超えたものです。唯一絶対の神が三つの神格をお持ちになり、それぞれの神格があたかも別々の神であるかのように存在しながら、その本質において全くひとつであるという理解は、それに近い他の存在がなく、類推も例証もできないためでもあります。毎日毎日、何十年も付き合っている自分自身のことさえ満足に説明できない人間に、無限の神、絶対の神の存在形態を理解しようなどというのが、そもそもおこがましいのです。

筆者は個人的に三位一体という言葉よりも､三格一体のほうがふさわしいと考えていますが、それよりも、唯一絶対の神がおられて、三つの神格を持つと説明するのではなく、三人の神がおられるが、その本質においてまったく同一であり、完全に一人であるという言い方の方が、わかりやすいかなと感じることもあります。どちらにせよこの真理は、不完全な人間が不完全な言葉を用いて表現することが、絶対に不可能なものです。従って、三位一体に関わる理解と表現が少しばかり違うからといって、異端扱いするのはかなりの思い上がりです。正直なところ、筆者は三位一体という神学を信じてはいません。父なる神と子なる神と聖霊なる神がおられることは、先の説明の通り信じていますが、三位一体といって、三と限ることに納得できないからです。神は人間の思考能力の限界を超えた方です。そのかたを人間の概念である数字の三に限定することに違和感を持つからです。私たちの神は三位一体という表現では、表現できない神だと思うのです。人類を救済することに関して記された聖書には、三位一体らしい記述の仕方がされていますが、この広い宇宙には、人類救済以外の次元があるはずであり、そこにおいての神は、四位一体であられるか、五位一体であられるかもしれません。

四福音書は、父も、キリストも、聖霊も神として取り扱っていますが、三位一体という理解をまったく説明していません。これは、多神教的な感覚がまだイスラエル民族の中に残滓とし存在していたことを考慮した結果なのか、それとも、これから福音が異邦人の多神教世界に入って行くにあたり、避けたほうがよいと判断されたのか不明ですが、三位一体は、下手に説明すると多神論と混同されやすいのは誰にでもわかります。

Ｖ．２．　使徒の働きに表された神観

使徒の働きに出てくるクリスチャンたちの神観が、新約聖書の他の部分の神観と異なっているというわけではありませんが、この書には、異邦人世界との新しい接点という特異な面があり、そこに表現されている神観に、重要な意味があるのです。

使徒の働きには、ユダヤ教の一分派に過ぎなかった初代のクリスチャンたち、すなわち「この道のもの」と呼ばれていた人たちの福音理解が、普遍的な福音として発展していく過程が記されています。そこにはまた、もう一つ大切な変化とも言うべきものがありました。それは、長い歴史に育まれて形作られたユダヤ人的な神理解、救い主の理解、救いの理解が、いかにして、まったく異なった神理解を持った人々に受け入れられるかと言う、福音の適応とでも呼ぶべきものです。キリストの伝道も初代の弟子たちの伝道も、ユダヤ文化のなかで育った人間を対象としていたからです。

ユダヤ人は、神についても律法についても、救い主についても、罪についてもかなりの理解を持っていました。ですから、救いの説明は案外簡単だったといえます。神や罪についての説明は、ほとんど不要なほどでした。救い主についても、彼らは長いあいだ熱心に待ち望んでいたのです。ただし、ユダヤ人たちが待望していたのは、民族的な救い主、国家的な救い主でした。個人的な罪からの救い、永遠の命などという概念は、かなりの修正と新しい理解を必要とするものだったはずです。

事実、そのギャップのためにキリストは理解されず、退けられ、排除され、十字架にかけられたのです。それでも、天地創造の唯一の神、絶対者の存在を前提として生き、その神が遣わして下さる救い主を待ち望むという大前提があるのですから、また、罪を憎む聖い神、犠牲の捧げものを求める神の理解と礼拝が、習慣の中に染み込んでいたのですから、話は早かったのです。

使徒の働きには、この神のことを知らない人々、救い主のことも律法のことも罪のことも知らない人々が出てきます。いわゆる異邦人です。弟子たちがまだ、有力なユダヤ人共同体が存在する地域で伝道していた間は、福音に接触した異邦人たちの大部分は、すでに正式にユダヤ教に改宗していたか、まだ正式には改宗していなくても、ユダヤ教に魅力を感じ理解をしていた人たちでした。ところが伝道の拡大に伴って、ユダヤ人よりも異邦人の方が多く福音に耳を傾けるようになってきました。

ここに至って、異邦人のための使徒パウロは、神の啓示の助けによって異邦人のための神学を発展させ、構築しなければならなくなりました。それはまず、ユダヤ人の民族主義から福音を開放することでした。モーセの律法を厳守して、ユダヤ人にならなければ救いはないという、多くのユダヤ人クリスチャンたちの考え方に反して、パウロは、救いにはモーセの律法を厳守する必要がないこと、ユダヤ人になる必要もないことを明確にしたのです。それが、「割礼の無用・信仰による義認」という一事に集約されているわけです。

パウロの異邦人伝道の物語のなかでは、ルステラでの出来事とアテネでの出来事が、特に衝撃的でした。（使徒 14：8～18、17：16～34）　ここでパウロは、パウロの語ることやパウロの信じている神に興味を持っていながら、完全な異邦人、まったく違う神観念を持っていた人々へ語らなければなりませんでした。そのとき彼は、罪のことからでも、キリストのことからでも、贖いのことからでも、十字架のことからでもなく、まず、神について語らなければならな

かったのです。

　このときパウロは、ユダヤ人伝道やユダヤ人を主体とした人々への伝道とは、異なった接触方法を選びました。もちろんそれ以前にも、パウロは完全な異邦人に福音を語ったことがあったはずです。その経験の中から、異邦人には異邦人向けの語り方をしなければならないことを、学び取っていました。それは、ユダヤ人でありながらも異邦人の文化の中で育ったパウロにとっては、比較的、対応しやすい問題だったと思われますが、パレスチナで生まれ育ち、完全なユダヤ文化の中で育った他の弟子たちには、とても難しいことだったのです。

　神のことを知らない人々には、まず、神について話をしなければなりませんでした。少なくても、私たちの言う神とは、天地万物を創造されそれを支配しておられる方であるという、共通認識を持たなければ、話がうまく前に進まなかったのです。神は唯一だとか、全知全能だとかいう神学的議論はさて置いても、とりあえず、共通の土俵を作らなければ、相撲にならないわけです。でも、直ちに天地万物の創造者という共通理解の土俵ができる訳でもありません。ですから、パウロはそこに行く前の共通ルールを見出そうとしています。それが、「あなたがたが知らないで拝んでいる神」です。

「みなさんは、わたしと同じ神を礼拝しているのです」と共通点を取り上げて、話し易くまた聴き易くしようと努力しました。それがパウロの話しかけの起点です。「あなたがたは知らなかったことでしょうが、その神が、実は、天地万物をお作りになった神なのです。あなたたちはすでに、わたしも礼拝しているこの神を礼拝しているのです」と語りかけ、自分が彼らから遠く離れた者ではないと、歩み寄っているのです。「あなたたちの神は神ではない。あなたたちの信仰は間違っている。あなたがたは偶像礼拝の罪を犯している」と、拒絶し責め立て距離を置く、日本でのキリスト教宣教のような話し方はしていません。

　パウロはたんに人々の関心と好感を買おうとして、妥協したのでしょうか。それともそれは正真正銘パウロの神理解であり、正しい神観だったのでしょうか。パウロはこんなところで妥協するような、「ヤワ」な人物ではありませんでした。これはパウロがそのとおり信じていた、正しい神観だったと見なければなりません。

　たとえ異邦人の神観が、実際のところ誤りだらけであったとしても、またそこに救いはなかったとしても、異邦人が、わからないながらも正しい神を礼拝しようとしていたということは、大いにありえるのです。宣教師として、アニミズムの強い社会で伝道をしてきた筆者の個人的体験でも、そのようなことは幾度もありました。

　ある時は異教の信徒が、彼らの神に教えられて、わざわざ長い時間と大きな金を費やして、福音を聞かせて欲しいと私を訪ねてきたこともありました。彼らの神が、そうするように告げたということですが、この人物の真面目な信仰心に真の神が目をお止めになり、彼がいつも礼拝している神を押しのけて黙らせ、彼の神になりすました上で、彼にお語りになったのかもしれません。私は四時間ほども費やして福音を語りました。彼はそれを丸ごと受け入れて、大喜びで帰って行きした。この出来事は、異教徒であったであろうアブラハムを、神がお召しにな

ったのと相通じるものです。

キリストの誕生のとき、東方から訪ねてきた「博士」たちは、実際は星占いをしていた人たちのようです。現代の西欧神学ではあまり触れたくないところですが、彼らは、異教の星占い師だったのです。その、異教の神を信じ、異教の占いに染まっていた人間たちに、神はある種の啓示か理解を与えて、幼い救い主を礼拝させるために旅をさせられたのです。

モーセの妻はミデアン人でした。モーセは事もあろうにユダヤ人ではない女を娶っているのです。これは、律法が与えられたあとだったなら、大変なことです。それだけではありません。妻の父がモーセを訪ねてきたとき、モーセは礼を尽くして丁重に迎え、彼のサジェッションさえも受け入れて、荒野の民の管理指導に生かしています。これは尋常ではありません。モーセの舅は異教の祭司だったのです。律法によって排除されるべき人間であり、人々の非難も予期しなければならない行動でした。

神は異教の国の王、ネブカデネザルにも、クロスにも語りかけてくださいました。遡ってアブラハムの妻のゆえに、神はエジプトの王パロに語りかけてくださいました。このような例は他にもあります。私たちは異教徒に語りかけられる神に、もっと注意を払うべきです。異教徒たちも、知らずしらず、正しい神を礼拝している可能性があることに気づくべきです。ヨブはイスラエルに属していた人間ではなかったようです。アブラハムが十分の一を献げたメルキゼデクも、出自が不明です。たとえ異邦人たちの神の理解がどれほど歪曲され、堕落し廃頽していても、彼らの中には、本能的な神意識が僅かながらでも残っていることがあるのです。

Ｖ．３．　異邦人の神意識に語りかけたパウロ

パウロは、そのような異邦人の神意識に語りかけたのです。彼は異邦人への使徒であり、異邦人のための宣教に尽くし、異邦人のための神学を展開しました。とはいえ、パウロの働きの大部分は、ユダヤ人と異邦人とが交じり合った人々に対するものであり、完全な異邦人文化の中で行われたものではありません。現代日本のような徹底した異邦人社会に対するものとしては、極めて基礎的で、まだ萌芽の状態というか、初歩的なところに留まっていたというべきです。

完全な異邦人文化に生きている日本人にも、充分に福音を適用できるように、パウロが基礎を据えた異邦人への神学をさらに発展させ、充実させて行くのが、私たち日本人クリスチャンの努めです。その場合、当然ながら、パウロと同じように聖書の基盤に立ち、聖書から外れることのない、異邦人のための神学を発展させて行かなければなりません。

パウロが異邦人のための福音、普遍的福音を語ったとき、彼はモーセの律法や詩篇、あるいは予言書から語ることができませんでした。モーセの律法をはじめ、イスラエル民族がエジプトから脱出した後に与えられた、選民としてのイスラエルへの律法や出来事からは、普遍的な福音を語ることが難しかったのです。それらは、原則的に選民イスラエルのための文書であり、

イスラエルの歴史と宗教文化の中でこそ、正しく理解されるものでした。

旧約聖書には、福音の普遍性という新約的な記述も、まったく無かったわけではありません。たしかにあるのです。でも鉱石の中の金のように僅かだったのです。さすがのパウロも、そのわずかな輝きから福音の普遍性の神学を展開することはできませんでした。彼はイスラエルが律法を与えられる前、おかしな言い方ですが、イスラエルがまだ選民でなかったとき、イスラエルが発祥していなかった時の出来事に、帰らざるを得なかったのです。アブラハムの時代は、律法がなかったという意味で、異邦人世界と同じだったのです。例えば、後の律法では禁止された偶像礼拝も、外国人との結婚も、近親結婚も、ゆるやかに許されていたのです。

アブラハムは、律法の行いではなく信仰によって義とされました。（創世記 15：6）　これがパウロの普遍的福音の、聖書的なよりどころであり基盤でした。パウロの主張を延長して正確に言うと、律法がまだ与えられていなかった時に生きていたアブラハムは、律法なしに義とされたのです。もっと言うなら、アブラハムは、私たちの言う「福音」を聞くことなしに救われました。救い主も十字架の贖いも、罪も悔い改めも知らずに救われたのです。彼が知っていたのは、自分に語りかけ、自分を導き、自分を守り、自分を祝福してくださった神を信頼するということでした。その信頼は、私たちが信仰と呼んでいるものです。

律法のなかった時のアブラハムは、律法の行いによって義とされたのではなく、神に信頼することによって義とされたのだとパウロは主張し、それを持って普遍的福音の神学の礎としました。極端な言い方をすると、普遍的福音は、福音を聞くことがなくても、ただ、天地の作り主である神に信頼するならば、救われるということです。アブラハムが救われたとき、はたして彼は、彼を召してくださった神が天地をお創りになった神であるということを、知っていたかどうかさえ疑問です。

アブラハムの信仰は、神についての深い知的理解に基づいたものではありません。ただ素直に委ねきる信頼なのです。そのようなアブラハムの信仰態度が、どこで育てられたのかは明らかではありません。多分、まだ周囲の人々と同じように、月の神でも礼拝していた時から、彼の性格としてあったものでしょう。（ヨシュア 24：2　この箇所は口語訳や新改訳よりも新共同訳の方が正しいのではないかと思います）

アブラハムは、自分を召してくださった神がいったい誰なのか、始めから分かっていたのではないと考えるべきです。単純に、自分が礼拝している神であると思っていたのかもしれません。アブラハムを召してくださった時の神は、アブラハムがご自分をどう理解しようが、あまり問題にはされず、ただご自分を信頼することをお望みになったようです。

これは小さな子供と親の関係に通じます。小さな子供たちが、自分を知的に正しく理解しているかどうかなど、親は問題にしません。自分を信頼し、自分に任せきり、自分の言うことを聞き、自分に甘えてくれればそれで良いのです。神に対するアブラハムの知的理解は、おいおい増し加わり、正しくされて行けば良いことです。大切だったのは、神との体験を積み重ねるごとに、神に対するアブラハムの信頼が強まり、強固なものになることでした。

アブラハムをお召になった時の神の約束も、現在の私たちプロテスタント・クリスチャンの考える祝福とは、だいぶ様相が違います。アブラハムに与えられた祝福の約束は、豊かな土地を与え、そこに住まわせ、子々孫々に至るまで繁栄させてやるということでした。当時の人々にとっては、そのような約束が一番魅力的であり、分かりやすいものだったようです。新約的な、甦りだとか永遠の命などという感覚は、まだまだ発展しておらず、萌芽の状態にも胎児の状態にも至っていなかったからです。肝心なのは、アブラハムが神について正しい知的理解をもち、神の祝福についても正確に把握していることではなく、あくまでも神を信頼すること、神に委ねて生きることだったのです。

V．４．　イエス様がお教えになった神

イエス様が人々を取り扱われたとき、二つの極端に異なった対応が見られました。一つは、ユダヤ人であると自覚し、ユダヤ人の律法に誇りを持ち、これを厳格に守っていると自信を持っている人々、たとえば上層階級に属するサドカイ派の人々、特に祭司階級の人々、あるいは宗教的エリートであったパリサイ派の人々、あるいは聖書学者に対するものでした。この場合、イエス様は非常に厳格であり、挑戦的であり、情け容赦なく隠れた罪を暴き出し、叱責し、厳しく断罪しておられます。

もう一つは異邦人や、ユダヤ人でありながら律法に従った生活ができていなかった罪人、たとえば遊女だとか姦淫の女、あるいは税金取りだとか、さらにはあまり律法を学ぶ機会のなかった、多くの市井のユダヤ人たちに対する姿勢です。あるいは立派な宗教生活をしていながら、傲慢にならず謙遜な態度を持っていた人々に対する姿勢です。この場合、イエス様はあくまでも優しく哀れみに富み、寛容と忍耐とを尽くして彼らに寄り添い、癒し、助け、救い、同情しておられます。

イエス様の態度は、接する人々によって異なっていたとはいえ、強調してお教えになった神の姿は同じでした。それは非常に優しくおおらかな神で、父なる神という言葉に要約されるものでした。イエス様のお教えになった父なる神は、天地をお造りになった神であり、旧約聖書に記されている厳しい神でありながら、良い者にも悪い者にも太陽を昇らせ、雨を降らせてくださる恵の神でした。鳥を空に飛ばせ、花を野に咲かせられる大きくおおらかな神でした。迷い出た一匹の羊を救うために苦労される神、自分を捨てて放蕩に身をやつした息子を待ちわび、帰ってくると走り寄り、罪も問わずにまず抱き寄せ、口づけし、靴を履かせ着物を着せ、大喜びでお祝いの宴を整える父親でした。

天地創造の神を、「あなた方の父」と呼び、それまでほとんど用いられたことのない、父なる神という呼び名を一般化されたのがイエス様です。

VI.　現代の日本人への福音

現代の日本人が、キリストが厳しく語りかけられたユダヤ人や、パウロが宣教の対象として活動した人々、あるいは西欧キリスト教国に生まれ育った人々と決定的に違うのは、神の律法を持たないことです。キリストが厳しく対応されたユダヤ人たちは皆、しっかりと律法の知識

を持っていました。パウロが宣教した人々の多くは、ユダヤ人の影響を強く受け、律法についてもかなり知っていたと思われます。西欧のキリスト教国の人々は、曲がりなりにも聖書を持ち、基本的な神の教えを理解していました。ところが日本人は、その点、まったく違うのです。

Ⅵ．１．　律法を持たないものへの福音

現代の日本人はアブラハムと同じです。律法を持っていません。律法を与えられた民族ではないのです。それならば、アブラハムと同じように、律法への知識なしに救われることが出来るはずです。あるいは、キリストについての知識も、十字架についての知識も、罪についての知識も、悔い改めについての知識も、義とされるためには不要であると言えるはずです。それらの知識がまったく不要だと言っているのではありません。それらは非常に重要で、絶対に欠く事ができないもの、決しておろそかにしてはならない、キリスト教神学の根幹です。しかし、救われるために知る必要はないと言っているのです。

もしも、多くのプロテスタント教会が教えているように、救いのためにはそのような知識とそれに従った悔い改めが必要だというのなら、それは信仰による救いではなく、知識と行いによる救いです。救いは、神に対する単純な信頼によるものです。

キリストが十字架について、罪人の身代わりに死んでくださったという事実は、事実であっても日本人には福音になりません。なぜなら、日本人は罪を理解しません。自分が罪人だという強い意識を持っていません。十字架の身代わりと言うとますますわかりません。代償の死という感覚、あるいは犠牲の理解は、牧畜が盛んでたくさんの動物に囲まれて生きていた民族にはあるかもしれませんが、農耕民族の日本人には非常に希薄で、ほとんど理解できません。日本人は、自分に救いが必要だとは感じていません。何もかもわからないのです。わからないのでは福音になりません。

これを分からせるには、大変な努力が必要です。長い時間がかかります。よほど呑みこみの早い人でなくては、教える方が先に疲れてしまいます。ですから、日本での伝道ははかどらないのです。

聖書に示されたイスラエル人向けの福音を、当時のグレコローマン文化に生きる異邦人向けに、分りやすく説いたのがパウロの福音です。ただこのグレコローマンの文化には、ユダヤ文化も相当混入していたために、パウロの福音には、まだまだユダヤ的な部分がたくさん残っていました。そしてそれはそれでいいのです。ただ、現在完全な異邦人文化に生きていて、完全な異邦人に伝道しようとしている私たちが、パウロの説いた福音で留まっていてはならないのです。

では、現代の日本人にとって、天地創造の神、絶対の支配者、唯一の神の存在とその神の性質とみ業が、福音と認識されるのはどのような局面でしょうか。絶対に聖く、罪を憎み、罪人を受け入れることができないために、独り子を十字架で死刑にしなければならなかった神の存

在は、日本人に福音でしょうか。それとも、どんな罪人でも愛し、罪人のまま引き寄せだき寄せ、なんの代償も求めずに、罪の説明も罪の指摘もしないまま罪を許し、たくさんの祝福で満たしてくださる、放蕩息子のたとえ話の中の父親のような神の存在が福音でしょうか。空の鳥を生かし、野の花を咲かせるお方を信頼して生きるならば、永遠の命を与えていただけると語る方が福音でしょうか。

どちらも聖書の教えですが、西欧プロテスタント神学は圧倒的に、ユダヤ文化の中に与えられた旧約聖書の律法をギリシャ的思考で発展させた、厳しい裁きの神の神学を強調してきました。絶対に聖く罪を憎み、悔い改めない罪人を永遠の刑罰で裁く神を語ってきました。でも、それが、日本で強調されるべき神の性質とみ業でしょうか。日本でまず強調されるべき神の姿は、日本人の神観念にできるだけ近い神の姿です。日本人の神観念の中から、聖書の神の姿を留めているものを拾い上げ、それを浄化して提示し直せば、日本人はその神を受け入れることが出来るはずです。と言うより、キリストが強調された父なる神、日本人のある者たちが勘違いして語る、「厳しい父なる神」ではなく、キリストが教えられたとおりの父なる神を語るならば、より多くの日本人が理解し、受け入れることができるのではないでしょうか。

Ⅵ．２．　日本人に受け入れられる福音

日本人に受け入れられる福音を、もう少し具体的に考えてみましょう。それはまず、神の紹介の仕方にあるでしょう。神について正しい理解を欠いている日本人に、神を「福音」として語ることです。神についての正しい知識を欠いていたイスラエル人に対し、神はまず天地創造の物語を通して、ご自分が誰であるかを示してくださいました。異邦人の町アテネに於いて、パウロも天地創造の神についてから話し始めました。日本人にも神についての基本的な正しい理解が必要なのです。

Ⅵ．２．ａ．　日本人が心の底で感じている神

先に述べたように、日本人はアニミズムの背景の中で、多神教を信じてきたかのように言われています。しかし日本人は、むしろ汎神論者であり、それも唯一神論に近い神観を持っているのです。

それだけでなく、多くの日本人は、太陽を昇らせ、確実に四季を巡らせ、雨を降らせ、作物を稔らせ、動物たちに命を与え、育てて下さる大きな力を感じ、それが神であると感じています。理屈はわかりません。問いただしてみても、なんら答えらしい答えを得ることもできません。でもそのような感覚を、うっすらとしてではありながら拭いさることもできない、しつこく留まり続ける意識として持っていて、なんとなく、神は一人であるように感じているのです。

なんとなくですから、日本人は唯一の神を信じていると言い切ることもできません。心の奥底に密かに感じているだけで、口に出すこともしません。というより、心の奥に感じているこ

とさえ自覚していないことが多いのです。ところが日本人の神社詣での習慣や、多神論に納得できないところ、あるいは日本人の真面目な宗教心について語り合っていると、ほとんどの日本人が、自分も、唯一の神を認めて貴び尊んでいること、その神に感謝すべきだと感じ、わからないままにも、心の中で手を合わせていることに気づくのです。

日本人の素朴な信仰心は、「何事のおわしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる」という歌に表現されている通りなのです。また多くの宗教表現を見ていながら、「分け入れる麓の道は多けれど、おなじ高嶺の月を見るかな」と詠って、一神論に近い感覚を表明しているのです。もちろんこの歌は、宗派は多くても仏教の本質は同じという意味ですが、多くの場合はすべての宗教に適用され、日本人の宗教的曖昧さと寛容さを示すものとして理解されています。でも、すべての宗教に適用される場合、この歌は一神論的感覚の表明としても用いられるのです。

そのように日本人がわからないまでも感じ、大切にし、崇めてきた神こそ、聖書に記されている神、天地創造の神、私たちが信じている神であり、キリストが強調された父なる神であると、お話して上げれば良いのです。「私たちは同じ神を信じています。ただ私たちクリスチャンは聖書に教えられて、少しだけ多く知っているだけです。でも、その少しだけがとても大切なのです」と、神のすばらしさをもっとはっきりと語ってあげれば良いのです。

Ⅵ．２．ｂ．　日本人が昔から崇めてきた神

だれでも、知らないものや新しいものに接すると、好奇心と共に警戒心を抱きます。外国から来たキリスト教の神を、聖く正しく、罪を責め、刑罰をちらつかせ、死を宣告する神として紹介したのでは、日本人は違和感を強くし、警戒心を通り越して恐怖を感じてしまい、とても近づきたいとは思いません。触らぬ神に祟りなしと、避けられてしまいます。

日本人が受け入れることができる福音は、自分が心の奥底で密かに感じていた神、多くの日本人が昔の昔から同じように感じ、密かに崇め感謝を捧げてきた優しく大きく暖かい神が、実は天と地をお創りになった力ある神であるという事実です。その神が、聖書を通してもっと明確にご自分を現し、人間が本当に人間らしく生きることができるように、道を示していてくださっていることを、教えて上げれば良いのです。

その神はもともと恐ろしい神ではなく、愛と恵みに富み、慈しみふかく、奥ゆかしく、愛情も豊かな神であることを伝え、昔から日本を祝福し、守り続けてきてくださった方であるとお話したら良いのです。西欧の宣教師のスーツケースに入れられて、日本に運び込まれた神ではなく、もともと日本に居てくださった神です。日本人もまた、良くはわからないまま、この神に感謝と喜びの気持ちを持ち続けてきました。わからないがために、たくさんの間違いがあったことも事実です。でも春祭りや秋祭りなどの多くの祭りは、この神に向けての感謝と喜びの表現だったのです。間違いがあったという事実よりも、神を感じ、神を認め、神に感謝を献げてきたという事実の方が大切です。

日本人はこの神を心の底でおぼろげに感じて来ました。ただ、あまりよくわからないために、昨日はあちらの神社、明日はこちらの祠とお参りをくり返しています。でも、どこのどの神社に詣でても、そこに祀られている神の背後に感じる、もっと大きな、もっと気高く、奥ゆかしいお一人のお方を感じて、素朴に礼拝をしています。その一人のお方こそ、私たちクリスチャンも信じている神であると言うのは、大きな福音です。自分が真面目な気持ちになったときに感じる隠れたお方が、天と地の支配者であるという事実は、確信と喜びと安心を与えるものです。

私たちの神は、恐ろしい外国の神としてではなく、日本人が昔から心の中で慕い続けてきた優しい神であることをお話し、懐かしさをもって近づくことができるようにお話してあげるのです。すべてのものの中に、神が宿っているという日本人の汎神論的な神観も、方向を誤るとすぐに多神教に陥ると述べましたが、聖書に教えられている神は、とても強い汎神論的性格を持っておられるのです。汎神論を誤りとして責めるよりも、その正しい部分を認めて、私たちの神を示してあげることです。

パウロの言葉によると、私たちの神は「すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる」方なのです。(エペソ 4 : 6) また、「神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです」(使徒 17 : 27～28) 私たちの神は、まさに汎神論を超えた汎神論的神です。この神はすべてのものの内におられるだけではなく、すべてのものをご自分の内に宿しておられる、無限のお方です。無限の神は天地を創造されたとき、ご自分の外側にではなく、ご自分の内にお創りになったのです。無限の外側というのはあり得ないからです。

Ⅵ. ２．ｃ． 目に見えない神

日本にはたくさんの偶像があります。人間は誰でも、目に見えないものごとを目に見える行為や対象物で、象徴的に表現しようとします。ですから偶像を作りたくなるのは、当然とも言えます。神も象徴的表現を認めて、積極的に用いておられます。過ぎ越の出来事は、決して忘れられないように、種を入れないパンを食べる過ぎ越の祭りで記念されていました。キリストの十字架の事実とその意義は、聖餐で表現されてきました。キリストの体にバプタイズされたという霊的出来事は、水の中に浸けられるバプテスマで表現されて来ました。

そのような象徴を認めてくださる神が、偶像だけは厳しく禁じておられます。神は目に見える形では決して表現できない、あらゆるものを超絶したお方です。目に見える物で象徴すること自体が、神を三次元という有限の世界に閉じ込めてしまうことであり、神の本姓への冒涜なのです。神はまた、周辺の人々が拝んでいる神々とご自分とが、まったく異なった存在であることを明らかにするために、偶像を禁止しておられるのです。

使徒パウロが言うように、偶像を拝むことはまさに愚かなことです。(ローマ 1 : 19～23)

ところがその愚さを理解するのは、普通の人間にとっては非常に難しいことです。そのため神は、イスラエル民族に偶像礼拝を禁止する前に、あらかじめたくさんの奇跡を見せ、神の助けを体験させた上で、「私こそあなたがたの神である。私だけを拝みなさい」と教え、偶像を禁止しておられるのです。現在の日本で、偶像と戦うことが使命であるかのように勘違いして、福音を語るよりも先に、「偶像礼拝は罪である」と叫んでいる教会がありますが、日本人はまだ、イスラエル人のようには神の奇跡を見せてもらっていないし、奴隷の家から助け出されてもいないことを、知らなければなりません。

つまり一般的な意味においては、日本人も愚かな偶像礼拝をしたりそれを認容したりする罪を犯していますが、イスラエル人のように、天地創造の神の明らかな自己顕現、自己紹介の奇跡も助けも体験しておらず、直接偶像礼拝禁止の命令も受けてはいないのです。ですから、日本人の偶像礼拝の罪を、イスラエル人や昔から聖書をよく知っている人々が偶像を拝む場合と、同じように考えてはならないわけです。

ただ非常に不思議なことに、日本には偶像がとても少ないのです。というより、日本人固有の信仰形態のなかには、偶像の影が薄いのです。決して偶像を作ったり拝んだりしてはならないキリスト教の中にも、カトリック教会のように、堂々と偶像を造り崇めているものがある程なのに、日本古来の神道的感覚の中には、偶像の入り込む余地がとても狭いのです。日本にある偶像の大部分は、本来神道のものではなく、仏教の影響で紛れ込んできたものです。

くり返しますが、日本人は、心の深いところで疼くように感じる尊い方を、偶像で表現することはできないと知っているのです。形でも言葉でも表現しきれないほど尊く、奥ゆかしく、畏（かしこ）く、気高く、恐れ多いと感じて、あえて曖昧にしたままそっとしておくのです。これほど尊い方について、ペラペラと喋る、西欧プロテスタント・キリスト教は、薄っぺらで慎みのないものと感じるのです。ですから、西欧の神学がどれほど体系的に論を整えて語っても、日本人にとってそれは、形を変えた偶像礼拝であってとても同意できないのです。感覚的に受け入れられないのです。

私たちが日本人に福音を語るとき、神のみ姿をもっと気高くかしこいものとして、尊びながら語るべきです。クリスチャンが神について語るとき、尊敬の念、敬神の念が足りなさ過ぎるのです。まるでまな板の上の鯉を捌（さば）くように、神を細切れにでもしているかのように見えるのです。

パウロがローマ書の一章で語っているように、人間は見えない神の姿を見える被造物に変えてしまう、愚かな罪を犯してしまいました。しかしここでパウロが言うのは、あくまでも一般的な意味での人間であって、日本人という民族を取り上げると、少しばかり異なっています。確かに、日本人にも偶像礼拝の罪はありますが、他の多くの民族とは比較にならないほど小さいからです。八百万の神々には、パウロの非難が当たるかもしれませんが、日本人の心の最も深いところにある信仰心では、神はあくまでも目に見えず、手で触れることもできず、言葉で表すこともできない方なのです。

パウロの教えるところによると、神が人間をあらゆる欲望と良からぬ思いに引き渡されたのは、この見えない神の栄光の姿を、見える人や獣や鳥や這うものの像に似せたからです。聖書を持たず、天地創造の神も信じてもいない日本が、キリスト教国と言われる西欧諸国にくらべても、決して遜色のないところにあるのは、パウロの言葉を適応すると、日本人が目に見えない神を目に見えないままに崇めているためであると言えます。

私たちは、福音として私たちの神について語るとき、つまり、伝道の一端として語るとき、神について饒舌な西欧プロテスタント神学をひかえて置くべきです。もっと恐れ多く畏（かしこ）き方として、尊敬の念をもって語り、目に見えないだけではなく、言葉でも表現できない方として、残しておくべきです。

Ⅵ．２．ｄ．　人の幸せを願う神

どのように偉大で立派な人物であっても、その人が自分に怒りを持っている、あるいは自分を嫌っていると知ったなら、身を隠して近づきません。好きにもなれません。私たちは西欧プロテスタント神学に倣って、すぐにも罪を責める神の話を持ち出します。罪を嫌い罪人を罰してやまない神です。そして、「あなたは罪人です」と責め立てるのです。これでは、日本人が私たちの神を好きになるはずがありません。

私たち日本人が好きになるのは正義の人ではなく、優しい人です。少しくらい正しさを犠牲にしても、情けを通す人です。私たちがお話する神は、正義の神であるより先に、まず、優しい神であるべきです。とことん人の幸せを願い、そのためにならどんなことでもして下さる神、どんなことでもして下さった神であるべきです。放蕩の末にボロボロになって帰ってきた息子を、罪の懺悔を聞くより先にかき抱く、あの父親のような神です。

私たちの神は確かに罪を嫌い、罪人を罰せずにはいない神です。でもそれは前面に出されるべきではありません。罪人であったアブラハムは、罪を悔い改めて義人とされたのではありません。キリストの十字架の贖いを信じて救われたのでもありません。私たちは日本人が喜んで近づきたくなる神、感謝して額（ぬか）づきたくなるような神として、人間の幸せを願い、人間の幸せのためにありとあらゆることをしてくださった神として、私たちの神を紹介したいものです。私たちの神は、犠牲ではなく哀れみをお求めになる神です。

人間が幸せに生きられるように、神がどんなに素晴らしいことをしてくださっているか、どれほど日本を祝福してくださっているかお話してあげましょう。私たちは毎日、人間の幸せを願う神の大きな恵みにあずかって生きていることを、話してあげましょう。豊かな自然の日本ですから、海の幸山の幸を語るだけで、神がどれほど人間の幸せを望んでおられるか、たくさんお話が出来ます。それら一つ一つのために、一緒に感謝の祈りを捧げることができれば、本当に幸いです。

Ⅵ．２．ｅ．　豊かな恵みで被ってくださる神

私たちの神は、見返りを求めない神です。代価を求めない神です。私たちの周りをあらゆる良いもので被ってくださいましたが、なにひとつ代価を求めておられないのです。

筆者の家の周囲には漁師さんがたくさん住んでいます。お向いさんは、大きな船でタイやイサキやブリを漁（と）ってきては、おすそわけをしてくださいます。一度にたくさんくださいます。ときには一週間に何度もくださいます。10kg を超すブリを３本も貰ったことがあります。４kg ほどのヒラス（ヒラマサ＝ブリに似た高級魚）を 14 本も持ってこられたこともあります。1.5kg のタイが８尾も混じっていました。１m 近いカンパチや、この辺ではアカハナと呼ばれるアジ科の最高級魚を何本ももらったこともあります。お陰様で、おすそわけのおすそわけにてんてこ舞いです。加えて、筆者は「釣りの神様」と来ています。

また、この辺は日本一のいりこの産地として知られているそうですが、後ろに住む漁師さんは、何艘もの大きな船で一度に何トンものいりこ用小魚を漁ってきます。ただで海からもらってくる大量の魚を、誰に感謝したら良いのか分からないために、大きな石碑を立てて「魚魂碑」と刻んで感謝の心を表しています。

筆者は北海道の山村で育ちました。春の山菜狩りはとても楽しいものです。ヨメナ、タンポポ、エゾエンゴサク、ミツバ、セリ、セイヨウワサビ、タラの芽、ウド、コゴミ、ゼンマイ、ワラビ、フキと挙げると切りがありません。秋にはたくさんの種類のキノコ。そして山葡萄にコクワ（サルナシ＝キウイの仲間）、グスベリと呼ばれていたグースベリー、赤い宝石のようなオンコ（イチイ）の実。それから、名前も知らないたくさんの木の実、草の実。自然は本当に豊です。冬にはウサギを追い、楓の樹液から甘い蜜を取り出したものです。

農作物も、家畜も、みんな神様が恵みでくださったものです。私たちの健康も家族もみな恵みです。日本人は自然の恵み、海の幸山の幸と言いますが、それが、神の恵みであることをはっきりとさせてあげ、神に感謝することから教えてあげることです。私たちの神は、感謝とよろこびを持って近づこうとするものを、「まず罪を悔い改めなさい」と言って退けられる方ではないはずです。罪の処理は、キリストの十字架によって既に完全に済んでいるからです。

Ⅵ．２．ｆ．　人の弱さや足りなさや間違いにとても忍耐深い神

西欧キリスト教神学の神は、人間の弱さや足りなさを罪とみなして、厳しく取り扱われる神です。キリストに現された寛容や同情や思いやりなどは、ほとんど見えません。西欧神学でも、神の優しさや寛容さあるいはなさけ深さはきちっと認めているのですが、宣教の場ではなかなか出てこないのです。罪を嫌い、義によって罪人を裁く神の姿は明らかですが、罪人に寄り添い、罪人のために悲しみ、罪人の弱さを担い、罪人のために犠牲を負う神の姿は、うまく表現できていないのです。

もちろん、これには理由があります。早く、キリストの十字架の贖いに話を持っていき、速やかに罪の悔い改めに導くためには、つまり、西欧キリスト教の神学に沿った救いに導くためには、神の厳しさを前面に持ち出すのも、なんともやむを得ないことなのです。何とかいうバプテスト系の団体のように、あちこちに黒地に黄色の看板を立て、「罪を悔い改めよ」「死後に裁きがある」「罪の支払う報酬は死である」と騒ぎ立てるのにも、三分（さんぶ）とまではいかなくても、一分くらいの理はあるわけです。

聖書全体に流れているテーマは、忍耐深く教え導かれる神です。新約聖書では、個々人の罪にも同情を示し、寛容力で包み、あくまでも忍耐深く赦す機会を待っておられる神が、キリストの人格と教え通して描き出されています。ところが、「悔い改めなければ地獄行き」が、西欧プロテスタント神学の伝道です。短気で怒りっぽい神がこの神学の神なのです。

優しい自然環境に恵まれた日本人は､優しく包み､あらゆる危険や悪から被い隠して下さる、母なる神を求めていると言われています。だから、怖い怒りの父なる神であるキリスト教の神は、日本人に合わないのだそうです。確かに日本人は優しい神を求めています。その優しい神を知ることが、日本人にとっての福音ならば、その優しい神を紹介してあげればよいのです。聖書に自己を表現してくださっている神ほど、優しい神はいないのです。

Ⅵ．２．ｇ．　人の願いを聞き入れて下さる神

様々な問題と痛みを抱えた人たちが、キリストのもとにやってきました。その時キリストは、「まず罪を悔い改めて真人間になりなさい」とはおっしゃいませんでした。痛んでいる人にはまず癒しを与え、悲しみに沈んでいる人には直ちに慰めを語り、罪の結果に打ちひしがれている人には、すぐに助けの手を伸べてくださいました。罪を責める言葉も、悔い改めの勧めもありません。

「キリストは厳しく罪を追及して、激しく悔い改めを迫っておられるではないか」とおっしゃる方がいることでしょう。たしかにキリストは、「悔い改めなさい。天の御国は近づいた」と言って、宣教を開始なさいました。また、罪を自覚せずに自らを正しい人間だと思い込んでいる人々には、この上なく厳しく対処して、罪の自覚に持って行こうとなさっています。だからと言って、罪の感覚が異なっている日本人に、キリストがなさったように厳しい態度で臨み、罪の自覚を正しく待たせることは不可能です。

キリストがお語りになったのは、ユダヤ人に対してだったことを忘れてはなりません。律法を所有し、聖い神に対する極めて明確な理解を持っていたユダヤ人だからこそ、罪に対して鋭い意識を持っていたのです｡「あなたがたのうちで罪のない者が､最初に彼女に石を投げなさい」とキリストがおっしゃった特、結局、そこに居た者全員が立ち去った出来事に、それが現れています。それでも、自分を正しい人間だと思い込んでいた人々や、自分の罪を隠し通そうとしていた人々は、悔い改めに導こうとされたキリストの意図を理解できませんでした。かえって厳しい糾弾の言葉に憎しみを増大させ、キリストをなき者にしようと計り、とうとう十字架に

付けてしまったのです。

　ましてや日本人は、聖書が語るような意味での罪は、ほとんど意識していないのです。日本人の罪意識は、根源的な人間性にまで及ぶものではなく、精々、犯罪であり、社会生活上の違反に過ぎません。絶対者という存在に曖昧な感覚しか持っていない日本人は、罪意識も曖昧なのです。

　たとえクリスチャンであると言っても、日本人の場合、まだ本当の意味での罪の悔い改めをしていないことが多いのは、そのためです。神を信じ、神に頼る生活を始めてから、祈り、感謝し、賛美を献げ、神と交わり、神の恵みの素晴らしさを知るうちに、忽然（こつぜん）と罪の自覚に至って、感動と喜びの中に罪の悔い改めをすることが多いのです。

　したがって私たちは、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。あなたがたを休ませてあげます」というキリストの言葉を、通り一遍の説明で終わらせず、まず、しっかりと伝えるべきです。何はともあれ、キリストの恵み、キリストの力、キリストの助けを体験させるべきなのです。恐ろしい神の前に悔い改めを迫るのではなく、恵みの神の前に悔い改めるように励ますのです。

Ⅵ．２．ｈ．　弱いものの傍らに立ってくださる神

　人間社会には不公平が満ちています。位の高いもの、権力を持っているもの、経済力のあるものなど、社会的強者が得をするような仕組みになっています。

　日本人は公平を愛します。アメリカ人のような「公平な機会」よりも、「公平な結果」を重視します。公平な機会を主張するアメリカ人のやり方は、今や世界に不公平な結果をもたらしています。アメリカは始めから富と能力と権力を持っているため、公平な機会を与えられると、必ず勝利者になるのです。

　日本人の公平な結果を求める考え方は、聖書の原則と良く調和します。人間は生まれながら「不公平」なのです。それぞれに特徴があり、得手不得手があり、貧富の差も、体力の差も、能力の差もあります。それを神は認めておられます。それでいながら、人間は愛し合うことによって、公平な結果を楽しむことができるように創られたはずなのです。

　ところが神から離れてしまった人間は、それぞれの能力や力や権力を自分の利得のために用いることを正当化し、他者を苦しめている事実に鈍感になってしまいました。それぞれの特徴、個々の特異性を差別にしてしまい、有利と不利に分けてしまったのです。そこで、神は、弱い者や小さい者の傍らに立って下さる方として、現れてくださったのです。

　キリストが公の働きを開始されたとき、有名なイザヤ書 61 章を開き、今日この言葉が成就したとおしゃって、ご自分が救い主であることを宣言なさいました。そのイザヤ書に記されて

いたのは、救い主が現れるとき、世の中の弱者に福音が語られ、福音が適用されるということです。このように、私たちの神は、弱い者の味方であり、弱い者に依怙贔屓（えこひいき）をされるお方です。これは、日本人の感情にふさわしい神です。そしてこの世の中の大部分が弱者なのです。

西欧のキリスト教というと、一般的にはどうしても王や権力者の宗教というイメージがあります。ましてや今、多くの日本人はキリスト教とアメリカをくっつけて考えます。そのアメリカがまさに弱肉強食むきだしの社会で、世界中で富と権利を傘に暴君ぶりを発揮しています。日本人も、アメリカにあやかりたいと思わないでもないようですが、最近はすっかりしぼんでしまっています。いまや自分は弱者であると自覚している日本人が、大部分なのです。弱者の傍らに立ち、寄り添ってくださる神が私たちの神です。

Ⅵ．２．ｉ．　喜びで満たして下さる神

喜びってなんでしょう。喜びという感覚は、なかなか説明しにくいものです。喜びは千差万別。喜びの度合いもまた計ることができません。

たとえ何があっても、喜びがなければ人生は虚しいものです。神は人間を神に似せてお創りになり､神との交わりの中に､最大の喜びを持つことができるようにしてくださったのですが、神との交わりを失った人間は、いま一所懸命に、神との交わりに代わる喜びを、探さなければならなくなりました。ところが、人間の心は神を求めるように造られているために、他のどのような代用品でも､納得できる喜びを得ることができないのです｡「空の空､すべては空である」と言った人は、おおよそ人間が望み得るあらゆるものを手にした後に､「みな空であった」と告白しているように、人間はたとえどのようなことを試し、またやり遂げたとしても、神との交わりに喜びを見出さない限り、決して満足できる喜びを持続させることはできないのです。

神は、すべての人が神との交わりを回復できるように、必要な全ての道を整えてくださいました。すべての人が、神に創造されたときの状態と同じようにされて、神と交わり、神からあふれ流れてくる命に触れ、新たな喜びに満たされることが出来るのです。今日本には、喜びや感動を感じないままに生きている人がたくさんいます。バブルが弾けてから生まれた人たちが成人し、将来に望みが持てない人が増えています。生きることに喜びを感じていない人がたくさんいます。永続的な喜びなんて存在しないと、空虚な思いに捉えられている人でいっぱいです。そこに神との交わりの喜びを語ることができます。単なる主観的で観念論的な宗教体験ではなく、実在の神が人間との交わりを求め、そのために道を備えてくださったのです。

祈りに答え、感動を与え、祝福をもって被って下さる神を語ればいいわけです。西欧の改革派の神学でも、人間の目的は神を喜ぶことであるとなっています。ただ、神の栄光を表すことという言葉も入っているために、神の栄光を表す義務の方が強く感じられます。それはそれで正しいことであり、それでいいのです。でも、福音として語るときに神の栄光を表す義務を語ると、喜びの方が小さくなってしまいます。本当は、神の栄光を表すことと神を喜ぶことは、

ひとつでなければならないのですが、伝道で強調すべきことはやはり、人間の喜びです。

神は人間が喜ぶ姿を喜んでくださいます。人間が幸せであるのを見て、神はまた喜んでくださいます。人間をお造りになった神は、どのような状態になったら人間は喜ぶことができるのかも、よくご存知です。神だけが、本当に人間らしい喜びを、与えてくださることが出来るのです。

私たちは、律法から始まる罪、刑罰、悔い改め、許し、というユダヤ神学の延長で福音を語りがちです。それはユダヤ人の背景を理解できる人たち、少なくても絶対の神の概念を持っている人たちには良いのですが、日本人には向きません。天地創造の時まで遡って、豊かな愛と恵みとの神、人間の幸せと喜びのために、あらゆるものを整えて下さった神について語るべきです。

本来の神のみ姿は、人間をはじめ、あらゆるものに命を与えて「産めよ。増えよ」と祝福された神です。おおらかな天地創造の物語とそれに続く聖書の記述にこそ、本当の神の姿が表されています。出エジプト記以後の律法の賦与や様々な出来事は、本来の神のみ姿というよりは、神と人間とのあるべき関係を取り戻すために、真剣にお働きになる神の姿です。人間的な表現をするなら、泥をかぶり汗を流し血を滴らせ、髪を振り乱して、失われたものを取り戻そうと奮闘なさる姿です。自分に対して罪を犯してしまった人間を、救い出そうと取り組まれる姿です。

私たちクリスチャンは、そのような神のみ姿に感動し、涙を流すのですが、一般の日本人には理解できるものではありません。やはり、天地創造の物語に表現されたおおらかな神、人間を祝福してすべての良いものを与え、ただひたすらに人間の幸せを願う神の姿を語るのが、一番良いでしょう。それが、多くの日本人が心の奥底で感じて来た、神の姿に通じるのです。

Ⅵ．２．ｊ．　永遠の命をくださる神

日本人は命を非常に大切にします。命はだれでも大切にすると思いますが、日本人の命に対する感覚は特別なものです。とにもかくにも、生きていることを最も大切だと思うのか、たくさんの金を使い多くの労力を費やしても、延命処置をするのが良いことのように考えています。他の国ではあまり見られないことだそうです。

これは日本人の死生観によります。日本古来の神道では、死後の世界についてはとても曖昧です。仏教でも来世は「あると思えばある、ないと思えばない」という程度のことしか言ってくれません。そういうわけで日本人は、来世についてはまったく無知でありまた懐疑的です。その結果、徹底して現世的なのです。この世に生きていることが何よりも大切で、生きていたい、生かしておきたいという願いが強いわけです。

日本人が命を大切にするのは、むしろ、死を忌み嫌い恐れているからとも言えそうです。来

世について強い不安を抱いているのです。どこのホテルにも四号室はありません。四階がない十階建てのビルもあります。一方私たちは、永遠の命についてかなり明快に語ることができます。来世に希望があることを教えてあげることができます。

永遠の命とは、ただ永遠に生きる終わりのない命という意味ではありません。永遠と訳されている言語の理解にもよりますが、物理学的な意味での永遠なのかどうかは不明です。永遠というものが、人間の理解力を超えているからです。しかしそんなことはあまり問題ではありません。とにかく、聖書は私たちが永遠の命を持つことができる、死ぬことがないと教えているのです。

またこの永遠の命は、時間の長さだけの問題ではありません。永遠に生きるとしても、やれ神経痛だ、偏頭痛だ、胃潰瘍だ膠原病だと医者通いしながらの永遠の命では、たまったものではありません。永遠の命とは、時間の長さだけではなく、命の質にも関わる概念です。聖書が教える永遠の命は、あらゆる肉体的欠陥、弱さ、足りなさを修復され癒された、健康な体での永遠の命です。

さらに、健康な体を与えられたと言っても、その健康な体で互いに争い戦いながら生きるのでは、生きるのが嫌になることでしょう。私たちの永遠の命は、私たちの心が純真無垢なものと変えられ、互いに愛し合い、心を通わせながら生きる永遠の命です。

もっといえば、この永遠の命とは必ずしも来世のものではなく、すでにこの世の命の中で味わうことができるものです。クリスチャンたちの人生は、それまでの生き方とはずいぶん異なります。とんでもなく廃頽した生き方をしていた人が、しっかりと立ち直ったとか、ひどい病気で苦しんでいたけれど、すっかり元気になったというようなことです。それは、やがて完全な形で現される来世の永遠の命が、今の命の中に、ある種の約束手形、保証、あるいは前味として、流れ込んできているということなのです。

死後の世界、来世に対し、強い不安と恐れを抱いている日本人には、永遠の命の教えは素晴らしい福音です。その永遠の命が、神に信頼するだけで与えられるのです。永遠の命についての教えを、よく理解しているかどうかではありません。永遠の命をいただけるほど、立派な人生を送ってきたかどうかの問題でもありません。十字架の上で、「主よ、み国の権威をもっておいでになるときは、私を思い出してください」と、小さな、小さな望みを託した強盗殺人犯も、いただくことができたのです。

神はキリストを通し、十字架の上で贖いのみ業を成し遂げてくださいました。その事実があるために、どのような人間でも、ただ神の愛と恵み、善意と優しさを信じて頼るならば、神は大きく広い心で受け入れてくださるのです。

Ⅵ．２．ｋ．　どんなに悪い人でも、そのまま受け入れて下さる神

日本人に馴染みのある言葉に、「善人なほもて往生をとぐ、いわんや悪人おや。しかるをよの人のつねにいはく、『悪人なほ往生すいかにいはんや善人おや』」という言葉があります。「善人なおもて成仏す、いわんや悪人おや」という言葉の方が一般的でしょうか。これはもともと親鸞聖人が言った言葉とされていますが、親鸞聖人よりずっと前の僧も、同じことを言っているそうです。

多くの人たちがこの言葉の真意がわからないで、いろいろな解釈を試みていますが、この言葉が不公平だと感じている人の多くは、キリストが対峙した、自分を義人だと思い込んでいた人たちによく似ています。親鸞の言葉は、聖書が教える「信仰による救い」に重なるところがあると言われていることは、よく知られている通りです。キリストも、「私が来たのは義人を招くためではなく、罪人を招くためである」と、おっしゃっています。

親鸞の言ったこととキリストの言ったことには、大きな隔たりもあります。仏教の教えとキリストの教えとは、基本的な点でまったく異なっているためです。でも、阿弥陀の本願が悪人を救うことであるということと、神の本当の願いは、罪人を救うことであるという点では、完全に重なり合います。

神はもともと、罪人あるいは悪人を救うためにキリストを遣わしてくださいました。神の救いの対象は悪人であり、善人は救いの対象外なのです。救いの対象外の善人が救われるとするならば、初めから救いの対象となっている悪人が救われるのは当然だと言うわけです。

また神の目からご覧になると、悪人に「大悪人・小悪人」の差はありません。差をつけるのはどんぐりの背比べの、人間の感覚に過ぎません。すべての人間が悪人なのです。善人は一人もいないのです。ですからすべての人が神の救いの対象です。すべての人が神の愛の対象、すべての人が神の哀れみの対象、すべての人が神の祝福の対象なのです。

救われるための唯一の条件は、自分が罪人、悪人であることに気づき、認め、自分には神の救いが必要だと、神の哀れみに頼ることです。とはいえ、既にいくども述べているように、日本人にとって、自分が罪人だと知りそれを認めるのは困難です。仏教的な意味での悪人だと認めるのは、それほど難しくはないかもしれませんが、どちらにしても易しくはありません。(聖書が教える「罪人」と、仏教が言う「悪人」とでは、意味が異なります)

ただ、人生に痛み苦しんでいる人たち、真剣に自分と対面している人たちは、大抵、自分が不完全な人間であることを認めます。そこで、罪人だとか悪人だとか宗教的な表現を使うよりも、人間的な弱さや欠点のために傷つき傷んでいる人を神は哀れみ、あれこれと詮索せずに、まず助けてくださるということを先に伝えるべきです。

西欧的神学による伝道は、しばしば絶対に聖い神の峻厳な裁きを強調します。「人が一度死ぬことと、死んだ後、裁きに会うことが定まっている」という聖書の教えを、早々と持ち出し、神を裁判官と見立ててその厳格さを語ります。その上、神を信じて悔い改めることをしないで死んだ人は、永遠の火になげ込まれると、裁きの恐ろしさを強調し、なんとか悔い改めようと

させるわけです。

キリストが喩えでお話になった、消えることのないゲヘナの火や、黙示録に記述された永遠に苦しみを与える火と硫黄の池などから、神は悔い改めなかった罪人をみな、永遠の火の池の中に投げ込まれると、短絡的に考えるキリスト教が多いのも事実です。しかし、悪人たちを十把ひとからげにして永遠の火に投げ込まれるようなことは、愛と正義の神にふさわしくありません。

聖書をもっと詳しくまた注意深く学ぶと、神はそのようなことはなさらないとわかります。神はあくまでもひとりひとりの行いに応じてお裁きになるのです。律法を与えられている人には律法を基準とした裁きが行われます。律法を与えられていない人は律法によってではなく、その人の「心に書かれた律法」によって裁かれます。(ローマ 2：6～16) 心に書かれた律法とは、神に似せて造られたという人間の本性です。その神に似た姿は罪によって傷つき、捻じ曲げられた部分があるとしても、失われてはいないということなのです。その神に似た姿という人間の根源的性質は、文化や環境によって異なるとはいえ良心として現れ、それぞれの生き方を定めていきます。すべてを知っておられる神が、それらをしっかりと吟味して、公平にお裁きになるのです。

キリストの厳しい警告の言葉は、キリストの教えを無視したり、それに反対したりし続けた、ユダヤ人に対して語られたものであることを知らなければなりません。律法をもたない異邦人に語られたものではないのです。また黙示録の記述は、もともと解釈が難しいものです。用いられている言葉の定義も容易ではありません。その中に一度か二度書かれていることをもって、死後の裁きという極めて重い主題について、断定的なことを言うのは正しくありません。

もっとはっきりと教えているパウロの言葉では、神はあくまでも厳格にお裁きになるのですが、豊かな慈愛と忍耐と寛容とをもって、罪人を悔い改めに導こうとしておられるとも語っています。(ローマ 2：4) 激しい怒りと厳格さと融通の利かない法解釈で脅し、罪人を悔い改めに導こうというのではありません。私たちはまず、神の恵み、慈愛、寛容、そして広く暖かい心を、実感させるようなアプローチをすべきなのです。

恐ろしさのための悔い改めは、本当の悔い改めではありません。怖い父、恐ろしい父、力と権力で縛り付ける父、ガミガミと小言を言い続ける父には、たとえ「悪いことをしている」、「親不孝をしている」と自覚していても、謝りたくはありませんし、近づきたくもありません。同じように怖い神は、「神かもうな」と忘れてしまいたくなります。ほんとうに謝りたくなるのは、父親の優しさ、温かさなど、なさけに触れたときです。

Ⅵ. ２．１． 人間の救いのために、すべての準備を整えてくださった神

日本人のなかにも、自分が神の祝福を受けるに足りない人間であると、自覚している人がたくさんいます。神に対する理解や感覚が乏しくても、もしも、神という存在者が本当にいるな

ら、自分は神の前に出るにはふさわしくないと感じているのです。心の奥深くで、おぼろげながらも至高の神、あるいは唯一の神を感じることがある日本人は、「なにごとのおわしますかは知らねども」と手を合わせながらも、自分は本当のところ、この神の前に出るには足りない人間だと自覚しています。「畏れながら」と、神妙な気持ちになるのです。

「罪、罪」と責め立てなくても、ほとんどの日本人には、自分は汚れていると感じています。日本人は、罪は理解できないかもしれませんが、汚れ（穢れ）は本能的に感じています。ですから、アレやコレやと難癖をつけたり悪態をついたりしながらも、独り鳥居をくぐり、社殿の前に来ると、自分はここに立つことができるような人間ではないと感じて、恥じ入るのです。筆者はいくつかの大きな神社に出向き、参拝に訪れる人たちに尋ねて回ったことがありますが、独り、あるいは少人数で参拝に来る人たちの多くが、社殿の奥にいらっしゃる神にではなく、もっと大きな神に頭を垂れるのであり、自分はその大きな神にふさわしい人間ではないと感じているのです。

太陽を昇らせ、季節を巡らせ、雨を降らせ、豊かな自然の中に自分たちを生かしてくださっている、大きな神に恩義を感じながら、自分たちはその神にふさわしい生き方をしてこなかったし、充分に感謝もしてこなかったと思っています。いわば親不孝な子供が、亡くなった父母に感じる思いと重なる感覚です。ですから日本人には、神に対する親不孝の罪として罪を指摘すると、よく理解してもらえると思います。

ところが神は、親不孝な子供を赦す優しく大きな親のように、私たちを赦して下さっているのです。親不孝な子供がそのまま戻ってくることができるように、何も持たなくてもいい、土産は何もなくてもいい、身一つで帰ってきてくれればいいように、すべての準備を整えて下さっているのです。それがイエス・キリストの誕生と十字架の贖いです。

日本人に福音を語る場合、私たちはキリストの十字架について語らなくてもいいのではありません。どこかの時点で語らなければなりません。しかし、最初に語る必要は無いと言っているのです。日本人が神の愛、恵み、哀れみ、慈愛、寛容などを、まず実感することができるようにすべきです。そして、感謝の心を育ててあげるべきです。

また、日本人が心の奥で感じている汚れや畏れは、正しい感覚であることを認めて、私たちは、この大きく恵み深い神の前に出るにはふさわしくないことを、もっとはっきりさせて上げれば良いのです。それにも拘わらず、神は私たちが神の前に出て、神と交わり、神の祝福をもっとたくさん受け、神の命に満たされ、永遠の命も持つことができるように、難しいすべての準備を、キリストの死という代償を通して、整えてくださったことを語ればいいのです。

本当の悔い改めは、恐ろしい刑罰を引っさげて睨みつけている神にではなく、刑罰を身代わりに背負うほどに人間を愛し、慈しんでくださっている、優しい神の前にこそできるものです。

結び

律法を持たない人に対しては､律法を持たない人へ向けた福音を提供しなければなりません。神を知らない人々には、神を知らない人々に理解しやすいように、福音を語らなければなりません。使徒パウロは、ユダヤ人向けに語られていた福音を、異邦人向けに語り直そうとしました。そのとき、彼は「信仰による義」という中心命題に行きあたりました。その信仰による義を説明するためには、どうしても、ユダヤ人の律法中心の神学から、律法が与えられる前のアブラハムの物語に、遡らなければなりませんでした。

とはいえ、パウロが取り扱った異邦人は、まだまだ、ユダヤ的な神学を理解できる素地を持っていた人たちが大部分でした。現代の日本人のように、神を知らない、律法も知らない、罪も知らない、救い主も知らない人たちとは違ったのです。今、この日本人に福音を伝えようとしている私たちは、福音の本質を少しも損なわず、水で薄めることもせずに、分りやすく、また受け入れやすく語っていく必要があるのです。

私たちは今、西欧のキリスト教神学から聖書の神学に立ち返って、根本から考え直さなければなりません。ユダヤの律法に立った福音理解からも、抜け出さなければなりません。西欧のキリスト教神学が完全に間違っているというのでも、ユダヤの律法に立った神学が誤っているというのでもありません。それでは日本人に対する福音にはならないと言っているのです。

日本人のための福音は、パウロがやったように、アブラハムの信仰の模範に戻らなければなりません。アブラハムは、まだ与えられていなかった律法を守ることによってではなく、神を信頼することによって、義とされたのです。彼は罪のことも知りませんでした。悔い改めも知りませんでした。確かにキリストの義を受けたのではありますが、キリストのことも知りませんでした。十字架の贖いも知りませんでした。彼の救いはそのような知識によらず、神を信頼することだけによったのです。

私たちは今、このような大胆なことを真剣に考え、完全な異邦人への伝道のため、パウロの神学をさらに発展させ、完全な異邦人のための神学を構築しなければならないのです。

考えてみると私たち日本の牧師は、ここで述べてきたようなことは既に、ある意味で実践しているとも言えます。教会に出席し始めた人に、突然、罪だの悔い改めだのと言い出す牧師や信徒は、かつての筆者のように、よほど西欧の「個人伝道法」の訓練でも受けて、西欧化した人種です。たいていの場合は、それらのことは説教だけに任せて、まずは、教会に足を踏み入れた人を優しく迎え、交わりの中に歓迎し、茶菓でも頂きながら会話を楽しみ、時には人生の問題や悩み事について話したりして、とにかく、続けて教会に来る気持ちが起こるように気を使って上げます。

そうこうしているうちに、来会者の中の何人かは何となく求道者となり、教会に馴染み、賛美にも祈りにも、説教にも違和感がなくなり、いつの間にかクリスチャンになったような気持ちになって、「洗礼を受けようかな」などと考えるわけです。ほとんどの場合は、教会が教える西欧の神学による伝道に納得し、それを受け入れたからではありません。それらのことは、洗

礼講座などで改めて教えられ、少々びっくりしながらも、もう洗礼を受けようと決心したのだからと、良くはわからないまでも、受け入れてしまうわけです。

それならば、罪の悔い改めや十字架の贖いという、ユダヤ的ギリシャ的西欧的神学に固執することはないはずです。神の素晴らしいところをまず強調し、神に信頼する生活がいかに素敵なものかを教え、神に頼ることを積極的に勧め、お祈りに導き、神の助けを体験させ、恵みを実感させるべきです。生きていること自体が神の恵みであり、自然の美しさも、与えられている山の幸海の幸も、まさに神の恵みにほかならないことを、強く実感できるようにして上げるべきです。そのようにして、神に感謝することを教え、私たちの感謝が与えられた恵みに対して、余りにも小さなものであることを理解させ、神を蔑（ないがしろ）にして生きてきた罪を自覚させて、そこから悔い改めに導くべきです。罪の悔い改めは、恐れと悲しみの中にではなく、感謝と喜びの中でさせたいものです。